



日本統計学会 会報 2010.10.25 No. 145

発行——日本統計学会
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-6 能楽書林ビル5F
(財) 統計情報研究開発センター内 日本統計学会事務局
Tel & Fax : 03-3234-7738
編集責任—岩崎 学(理事長) / 中西 寛子(庶務理事)
根本 二郎(広報理事) / 鈴川 昌夫(広報理事)
振替口座—00190-2-61361
銀行口座—みずほ銀行広尾支店普通 1092212番

JAPAN STATISTICAL SOCIETY NEWS

目次

1. 巻頭随筆：最小2乗法の発案 …… 森棟公夫… 1	10. 2010年度統計関連学会連合大会報告
2. 理事長再任挨拶 …… 岩崎 学… 3	10.1 プログラム委員会報告 …… 椿 広計… 21
3. 学会誌編集委員長就任挨拶	10.2 チュートリアルセッション報告
3.1 英文誌 …… 小林正人… 4	…… 星野崇宏・山本 渉… 22
3.2 和文誌 …… 青嶋 誠… 4	10.3 市民講演会報告 …… 椿 広計… 23
4. 第15回日本統計学会賞について	10.4 コンペティション講演報告 …… 瀬尾 隆… 23
4.1 日本統計学会賞 …… 美添泰人… 5	受賞のことば …… 廣瀬 慧… 24
4.2 受賞のことば …… 三浦由己… 6	…… 生亀清貴… 25
…… 矢島美寛… 7	…… 近藤健司… 25
…… 藤井光昭… 8	…… 高橋 翔… 26
5. 第6回日本統計学会統計活動賞について	…… 中江 健… 26
5.1 日本統計学会統計活動賞 …… 美添泰人… 9	…… 本橋永至… 27
5.2 受賞のことば …… 椿 広計… 10	11. 会長候補者推薦のお願い… 美添泰人… 27
6. 第6回日本統計学会統計教育賞について	12. 和文誌特集号のお知らせ
6.1 日本統計学会統計教育賞 …… 美添泰人… 13	…… 大森裕浩・渡部敏明… 28
6.2 受賞のことば …… 飯塚敏之… 14	13. 会員からの投稿記事
…… 中本信子… 15	統計資料館・統計図書館の紹介… 飯島信也… 28
7. 第4回日本統計学会研究業績賞について	14. 第5回日本統計学会春季集会について
7.1 日本統計学会研究業績賞 …… 美添泰人… 16	…… 岩崎 学・縄田和満・佐藤美佳… 29
7.2 受賞のことば …… 栗木 哲… 17	15. 2011年度統計関連学会連合大会について …… 29
…… 下平英寿… 18	16. 第78回日本統計学会総会報告 …… 29
8. 第3回日本統計学会出版賞について	17. 評議員会議事録 …… 34
8.1 日本統計学会出版賞 …… 美添泰人… 20	18. 理事会議事録 …… 36
8.2 受賞のことば …… 朝倉書店… 20	19. 研究部会新設公募(再掲) …… 37
9. 第24回日本統計学会小川研究奨励賞について	20. 新刊紹介 …… 38
…… 美添泰人… 21	21. 学会事務局から …… 38
	22. 投稿のお願い …… 39

1. 巻頭随筆：最小2乗法の発案

森棟 公夫 (椋山女学園大学)

京都大学にはほぼ35年務めて、3月に退職しました。京大は18才の時から居たので、45年間席があ

ったということになります。今で言う博士後期ではアメリカに留学し、その後もアメリカ、オース

トラリアに行っており、昔は京大意識が薄かったのですが、今から思うと海外に居た記憶も薄れ、要するに京大に45年居てこのたび無事退職したという事になります。4月からは名古屋の椋山女学園で教えることになりました。京都の生活とは変わり、地下鉄沿線に住み、地下鉄沿線の大学に通っています。環境の変化は大きくて、9月現在もまだ調整過程にあります。所属先の学部ですが、元々は家政科、それが科学系、文学系、社会科学系などに分離したと言えば、大凡の学部カラーを伝えることができると思います。所属は社会科学系です。一学期はパソコンを使った統計分析入門のような授業をしましたが、検定を理解して貰うことが困難でした。帰無仮説、対立仮説、棄却域などは難しい概念で、まず対立仮説を教えるのは止めました。対立仮説は棄却域の設定に使うだけです。検定統計量の値が帰無仮説と大きく違えば棄却する、と説明しました。「帰無仮説が棄却される」は帰無仮説がデータによって支持されないと説明するところは良いのですが、「帰無仮説が棄却できない」は「帰無仮説をよしとする」としました。「帰無仮説が誤っているとは言えない」といった間接的な表現は理解されないようです。紆余曲折の末ですが、帰無仮説があり、これが正しいか誤っているかという二分割なら簡単なようです。理解の早い生徒達には「帰無仮説が誤っているとは言えない」でも理解できますが、多数には無理です。データの傾向が帰無仮説と似ているかいないかが分かればいいのではないのでしょうか。棄却域の大きさも、これは自分で決めるなどすると混乱を増しますから、5%と始めから決めて進めました。前期は線形回帰まで教え、後期はシラバスでは、系列相関、ダービン・ワトソン検定とかも入っているのですが、どうしますか。

話変わって、京大を退職する際には最終講義を公開する習慣があります。私は、「最小2乗法の歴史」という話をしました。最小2乗法の発案に至る歴史的な経緯をまとめたものですが、この中で会員の皆さんが関心を持たれそうな内容を少し述べたいと思います。まず、Gauss か Legendre

かという priority 争いですが、Stigler (Annals of Stat. 1981) の評価が私は最も信頼できると思いました。最小2乗法の最初の応用例はフランスの測定データを用いたメートルの決定、あるいは地球の大きさの決定ですが、Gauss は子午線の四分弧長が2565006モジュール (ダブルトアズ)、楕円の扁平率 (1-短径/長径) が1/187と1799の公開された手紙に値だけを書きます。この手紙はステイグラーの論文に訳が含まれています。後日、計算法は説明せず、これは最小2乗法で計算したと主張します。Legendre は Nouvelles Méthodes (1805) (Google bookにある) の補論で次の定式化をします。回帰式は

$$E = a + bx + cy + fz + \&c.$$

と表現されますが、Eは誤差、a, b, c, fは変量の観測値、x, y, z, は係数です。Legendre では、a, b, c, fは既知の coefficients と呼ばれます。そして、誤差の2乗和を最小化する条件として、

$$0 = \int ab + x \int b^2 + y \int cb + z \int fb + \&c.$$

等の式が導かれます。積分記号は和記号と同じで、これが正規方程式です。Stigler は Legendre がこのように正規方程式を定式化したので、その後、最小2乗法は諸科学で広く使われる様になったと言います。

同じ補論の応用例は特殊です。対象は Gauss と同じフランス観測値を用いた地球の大きさの決定です。おもしろいので、我々の記号を用いて Legendre の計算を簡単化して説明しましょう。(観測個数が二個の例では誤差無しとなるので、この特異な解法は通常的回帰計算と一致します。処理の仕方だけを見てください。) 観測値は子午線に沿った連続した2区間の距離と、区間の切れ目の3地点の緯度です。そして式は、各区間に対して、

$$E_2 - E_1 = y_1 + \beta x_1 + \gamma z_1,$$

$$E_2 - E_3 = y_2 + \beta x_2 + \gamma z_2,$$

と設定されます。左辺Eは各観測点における観測誤差です。変量は、区間距離、区間中点の緯度、区間の緯度差の変換値です。左辺の定義を無視すると切片がない回帰式となり、原データを使い推定すると、四分弧長は2564768.6モジュール、楕

円の扁平率は1/150.4, となります。(原データは4区間。) Legendre は, ここで, $E_1+E_2+E_3=0$, という制約を置きます. そうすると,

$$E_2 = \{y_1+y_2+\beta(x_1+x_2)+\gamma(z_1+z_2)\}/3,$$

と導け, E_1 と E_2 も同様の表現が求まります. 最後に, 3個の誤差 E_1, E_2, E_3 の2乗和を β と γ について最小化して解を求めます. 原データについては, 四分弧長2564800.2モジュール, 扁平率1/148となります. 値はほとんど変化しませんが, この誤差の使い方が標準と異なり, 特殊であると私は言っています. この結果だと, 1mは, 0.25648モジュールです. Laplace が Mécanique Céleste (1799-1805) で求めた最終的な1mの長さ

は0.256537モジュールです.

先に述べた Gauss の値ですが, 何としても追認できません. また他の計算結果からの違いが大き過ぎます. priority 争いの中で, Gauss は meine Methode (1799) の計算手続きを公表することはなく, 尊大横柄な態度を取り続けます. これでは, 最小2乗法が広く使われる事は無かったでしょう.

余談ですが, ネットで調べると, Stigler の History of Statistics (1986) にも出てくる恰幅の良い Legendre の自画像は, 赤の他人だそうです. ほぼ200年近く, 他人の画像が間違われて使い続けられていたことに驚かされます. さて, 最小2乗法の発案については何が真実なのでしょうか.

2. 理事長再任挨拶

岩崎 学 (成蹊大学理工学部)



2010年9月6日に開催された日本統計学会評議員会にて理事長に再任されました. 前日の9月5日に行われた旧評議員会で退任の挨拶をしたのですが, 翌日の新評議員会で改めての選出となりました. 大変名誉なことであると感じています. 新理事の方々と共に

精一杯学会の発展のために尽くしていく所存ですのでよろしくお願いいたします.

前期の2年間では, 北川源四郎前会長および美添泰人現会長ならびに理事の皆さんと共に統計学会を運営してまいりました. 中でも美添会長の卓越した手腕の下で, 「学会の法人化」, 「統計検定の実施」の2点につき, 評議員会ならびに総会での賛同を得て実施の道筋がつけられたことは大きな出来事でした. やや性急に過ぎるとのご意見も頂戴いただきましたが, 社会の変転のうねりの中で, この機を逃してはならないと感じたことと, 私の任期中に総会での賛同を得るところまで持って行って次に引き継ぎたいと考えて事を進め

ました. 次に引き継ぐのではなく自分がその任を担うとは思っていませんでしたが, 役目を託された以上責任を持って実現させていきます.

学会の社会的役割は大きく変わりつつあります. 「法人化」及び「統計検定」はその線に沿ったものです. これまでの学会は, 研究者の集まりであり, 研究上の情報交換としての役割が大きかったと思います. それはそれで重要なことであり, 今後も継続していかなければなりません. しかしながら, 実社会は統計を大いに必要としていて, われわれ学会員は統計の専門家としてその負託に応える必要があります. コンピュータとネットワークの飛躍的な発展により統計的データ解析の需要はますます増大し, これまで以上に客観的なデータに基づく evidence-based な意思決定の実践は, 医学, 理工学はもとより社会科学のあらゆる分野に広がりを見せています. また, 初等中等教育に統計の内容が盛り込まれたことも社会の統計への期待を表わすものといえるでしょう. 一方, 国際社会における日本の地位向上のための取り組みも欠かせません.

今期理事会の課題である「法人化」および「統

計検定」ならびに「国際化」は、学会会員の皆さんの協力なしには一歩たりとも進みません。統計の専門家集団である日本統計学会のメンバーとして、統計学の更なる発展と普及を通じてよりよい社会を築くため、学会員の皆さんのご協力を切にお願い申し上げます。

理事長略歴：1952年静岡県浜松市生まれ、1977年

東京理科大学大学院理学研究科数学専攻修士課程修了、1988年理学博士（東京理科大学）、茨城大学工学部助手、防衛大学校数学物理学教室講師・助教授を経て1993年より成蹊大学に勤務、1997年教授、2006年より成蹊大学情報センター所長を併任、現在に至る。

研究分野：コンピュータ利用の多変量データ解析法の理論と応用、統計的因果推論など。

3. 学会誌編集委員長就任挨拶

3.1 英文誌

小林 正人（横浜国立大学）

この度、谷口正信前編集長の後任として、日本統計学会英文誌編集長となりました横浜国立大学の小林正人と申します。学生の理系離れ、高校数学における統計学の必修化、官庁データの公開拡大など、多くのチャレンジングな課題が統計学会につきつけられています。実学としての統計学はこれらの新しい流れを全く無視して進むことができませんが、厳密な数理と論理の追求無しには学問としての統計学も存在しません。この微妙なバランスに十分配慮しつつ、日本統計学会誌が日本の統計学の研究発表の頂点であり続けられるよう、微力ながら尽力する所存ですので、皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

3.2 和文誌

青嶋 誠（筑波大学）

この度、和文誌担当理事として、学会運営のお手伝いをさせて頂くことになりました。美添会長、岩崎理事長、そして、前理事の渡部編集長のご支援のもと、新体制の和文誌編集委員会が今年の12月からスタートします。

日本統計学会和文誌は年に2回の刊行です。渡部編集長をはじめ編集委員会のご尽力により、これまで様々な特集が掲載されました。この伝統は、

新体制においても、しっかりと受け継いでいきたいと思っております。私が編集長を引き継ぐことになる2011年9月号では、大森裕浩先生と渡部敏明先生に編集のご協力を賜り、「MCMCの経済・経営データへの応用」の特集を掲載する予定です。

和文誌編集委員会では、今後も各分野における先端研究の紹介や教育的な記事について、特集を企画します。従来の原著論文も掲載します。会員の皆様および大学院生の方々には、是非とも奮ってご投稿を頂けますようお願い申し上げます。日本統計学会和文誌にご投稿を頂ければ、次の3つのメリットがあります。

- (1) 日本語で発表することによる啓蒙効果が大きい。特に多分野に跨る統計学のような学問領域は、他の関連分野に向けて日本語で情報を発信することのメリットが大きい。
- (2) 論文審査に迅速な対応が期待できる。これは、特に大学院生にとってメリットが大きい。
- (3) ご投稿を頂いた論文に対して、日本語ならではの丁寧な審査コメントが期待できる。日本統計学会和文誌にご投稿のメリットが大きい。

皆様にとって魅力ある雑誌を目指して、今後も様々な工夫を重ねて参ります。日本統計学会和文誌のあり方や今後の特集について、ご意見やご提案がございましたらお聞かせ下さい。11月までは現体制の渡部編集長宛に、12月からは新体制の編集委員会や私宛に、ご連絡を頂ければ幸いです。

4. 第15回日本統計学会賞について

4.1 日本統計学会賞

美添 泰人（日本統計学会会長）

第15回日本統計学会賞の受賞者は

三浦由己氏（駿河台大学名誉教授）

矢島美寛氏（東京大学）

藤井光昭氏（中央大学）

の方々に決定いたしました。受賞者には、賞状と副賞の時計が贈呈されました。受賞理由と略歴は以下の通りです。

[1] 受賞者氏名：三浦 由己 氏

略 歴：1953年 東京大学理学部数学科卒業、1955年 東京大学大学院（旧制）前期修了、1954年 総理府入庁、統計局勤務、1962-65年、1971-73年、1981-83年 国連勤務、1983年 総理府統計局製表部長、1984年 総務庁統計センター所長、1986年 総務庁統計局長、1988年 退官、1990年 駿河台大学経済学部教授、2001年 退職、同大学名誉教授

受賞理由：三浦由己氏は、総理府統計局、国際連合等に長年にわたり勤務し、その職務において公的統計の開発、整備、分析に統計理論を応用するとともに、公的統計の成果を学界に発表して統計学発展の発展に尽力した。1987年、国際統計協会（ISI = International Statistical Institute）の第46回東京大会の開催責任者として同大会を成功に導いた。同年、ILO（国際労働機関）主催の第14回国際労働統計家会議において議長を務め、雇用・失業に関する国際統計基準の採択に貢献した。ISIの国際統計リテラシープロジェクト（The International Statistical Literacy Project）では設立メンバーとなり、2000年にISIの統計教育分科会（IASE）主催の国際会議を日本に招致し、組織委員長として会議の開催に貢献した。同氏は、これら国内外の活動を通じて、日本の統計の発展及び日本の統計界による国際貢献に大きく寄与した。同氏のこのような統計学の発展及び普及に対する多大な貢献は、

日本統計学会賞にふさわしいものである。

主要業績：

“A comparative analysis of operational definitions of the economically active population in African and Asian statistics”（1965）Proceedings of the World Population Conference, Belgrade.

「標本調査法」（1970）、一粒社

「統計小辞典」（1992）、日本統計協会（編集代表）“New development of statistical education in the secondary-level education in Japan”（1999）Bulletin of the International Statistical Institute. LVIII, Book2.

「統計の役割－新しい世紀に向けて」（1999）日本統計学会誌 Vol.29, No.3

1962年～65年 国際連合アフリカ経済委員会（ECA）において統計の開発・整備を指導

1971年～73年 アジア極東経済委員会（ECAFE）においてアジア極東地域の人口統計に関する調整及び基準の設定に貢献

1981年～83年 国際連合国際人事委員会において国連職員の地域給の調整の基礎となる統計の整備に貢献

1999年 ISI の国際統計リテラシープロジェクトを主導

2000年 国際統計教育協会（IASE）の国際円卓会議を日本で開催

[2] 受賞者氏名：矢島 美寛 氏（東京大学）

略 歴：1975年 東京工業大学理学部情報科学科卒業、1980年 東京工業大学理工学研究科修了（同年理学博士）、1980年 東京工業大学理学部助手、1988年 和歌山大学経済学部助教授、1990年 東京大学経済学部助教授、1996年 東京大学大学院経済学研究科教授、現在に至る。

受賞理由：時系列解析の理論研究において多大な貢献をした。特筆すべきものとして、長期記憶モデルの最尤推定量の研究や、誤差項が長期記憶モデルにしたがう時系列回帰モデルの最小二乗推定

量の研究があげられる。時系列解析の研究は、70年代には自己回帰移動平均（ARMA）モデルを中心とした標準的な手法が確立したが、差分をとって定常化し自己回帰移動平均モデルをあてはめるといった標準的な手法がそぐわない時系列の存在が経済データや水文学の分野で指摘され、長期記憶モデルに関心が持たれるようになった。このような中で長期記憶過程の推定における一致性・漸近正規性に関する矢島氏の世界に先駆けた結果は国際的な注目をあび、その後の急激な研究の進展をもたらした。長期記憶過程に関する多くの深い理論研究に加え、矢島氏は時系列モデルのノンパラメトリック推定や時空間モデルの推定などでも国際的な業績をあげている。また多くの学会活動、著書、解説論文の執筆を通じて我が国の統計学界の発展に多大な貢献があった。

主要業績：

1. On estimation of long-memory time series models. *Australian Journal of Statistics* 27, 303-320, 1985.
2. On estimation of a regression model with long-memory stationary errors. *Annals of Statistics* 16, 791-807, 1988.
3. Asymptotic properties of the LSE in a regression model with long-memory stationary errors. *Annals of Statistics* 19, 158-177, 1991.
4. On nonparametric and semiparametric testing for multivariate linear time series. *Annals of Statistics* 37, 3529-3554, 2010. Coauthored with Yasumasa Matsuda.

[3] 受賞者氏名：藤井 光昭 氏

略 歴：1959年 京都大学理学部数学科卒業、1968年 理学博士、1960年 統計数理研究所研究員、1963年 東京工業大学助手、助教授、教授、理学部長、大学院情報理工学研究所長、1996年 大学入試センター副所長、1997年 東京工業大学名誉教授、2002年 中央大学研究開発機構教授。現在に至る。

受賞理由：時系列解析の草創期におけるパイオニアの一人として統計学の発展に大きく寄与した。

確率過程論と時系列解析が未分化の当時、時系列関連の推定法、自己回帰移動平均モデルの推定問題、スペクトル密度関数のノンパラメトリック推定など、後に統計の時系列解析に必須となる基本的道具の開発に努め、重要な貢献を成し遂げた。これら研究における業績の他、日本統計学会理事長、日本学会協議会員など学会活動においても多大な貢献があった。

主要業績：

1. Estimation of coefficients of an autoregressive process by using a higher order moment. *J. Time Ser. Anal.* 2, 87-93, 1981.
2. Some properties of conditional quasi-likelihood functions for time series model fitting. *J. Time Ser. Anal.* 9, 345-353, 1988.
3. Estimation of coefficients of time series regression with a nonstationary error process. *J. Time Ser. Anal.* 16, 105-118, 1995. Coauthored with Yoshihiro Usami.
4. Embedding a Gaussian discrete-time autoregressive moving average process in a Gaussian continuous-time autoregressive moving average process. *J. Time Ser. Anal.* 28, 498-520, 2007.

4.2 受賞のことは

[1] 受賞のことは

三浦 由己（駿河台大学名誉教授）

私のような長く行政機関に籍を置いて統計の仕事に携わった者が、このような名誉ある賞を頂き、大変光栄に存じております。統計の歴史が長い欧米諸国では、政府の統計機関と統計の学界との連携が強く、そのことが政府統計と学界双方の発展に寄与してきました。日本においても、近年、統計の学界の中に政府統計の問題に関心を持つ方が増えてきて、一方、統計実務者が学会の場で報告することが多くなってきています。そのような傾向の中で、今回私が学会賞を頂いたことは、私個人の業績というよりは、政府統計への評価の表れで、大変喜ばしく、心から感謝申し上げます。

私が総理府統計局（現総務省統計局）に入ったのは五十数年も前のことですが、以来、1988年に

退官するまで三十三年余の間、ごく短期間を除いて、ほとんどの期間を統計部門で過ごしました。行政機関の中ではそのようなキャリアを辿ることは極めて珍しいことですが、統計のように専門性の高い仕事に一貫して長年携わることができたのは、私にとっては非常に幸いでした。統計局での仕事の中では、調査の方法、標本設計の改善、新規調査の企画設計、分析方法の改善、誤差の評価など、色々なことを行ってきました。在任中、3回にわたり国連に向向して、国連職員としてアジアババ、バンコク、ニューヨークに滞在して、開発途上国の統計の問題を含む国際統計の諸問題に取り組むことができたのは、貴重な経験でした。また、1960年と1987年の2回日本で開催された国際統計協会 (ISI) 大会に、日本側の事務局の一人として参画することができたのも幸いでした。

退官後は駿河台大学経済学部教授となり、非常勤講師を含めて十数年間、大学の世界で教育・研究に従事してきました。行政機関の中にいるときと違い、自由に国内、国外での学会の活動にも参加することができるようになりました。国内では、主として日本統計学会統計教育委員会の活動に携わってきました。ISI では、1991年から1995年まで Council Member を務めたほか、いくつかの委員会の委員長などを務めました。また、欧米の統計学者、政府統計幹部と協力して、一般市民がデータを正しく読み取り、理解する能力のレベルを向上させる Numeracy プロジェクトを始めました。このプロジェクトは、現在は統計教育のセクション IASE に引き継がれ、統計リテラシー・プロジェクトとなっています。

長い統計遍歴の中で、国際機関、各国統計局、国内外の学界の大勢の方々とのつながりができ、それが縁で、国連統計部、国連 ESCAP 人口部、OECD 統計局、ISI のセミナーや専門家会議、米センサス局の年次研究会議など多くの会合に招かれたりしたほか、1987年の ILO 第14回国際労働統計家会議の議長を務め、また国連国際人事委員会の地域調整給問題諮問委員会の委員を通算5期20年務めました。さらに、アメリカ東西センタ

ーとの協力で設立したアメリカ・アジア・太平洋地域統計局長協会の会長を4期8年間務めました。大学退職後も、タンザニア及びミャンマーの統計局を支援、強化する JICA のプロジェクトに従事しました。

これら諸々のことが受賞理由になったようですが、もとよりこれは私個人の力だけによるものではなく、私のキャリアの中で共に仕事をしてきた先輩、同僚、大勢の部下の方々のご指導、支えによるところが大きく、ここに改めてこれらの方々から感謝申し上げます、受賞のことばといたします。

[2] 受賞のことば

矢島 美寛 (東京大学)

このたびは日本統計学会賞を賜り、誠に有り難うございます。光栄に存じます。またかつて統計学会の運営のお手伝いをさせていただいた三浦元会長、恩師である藤井先生と同時に受賞しましたことは、二重・三重の喜びです

大変名誉な賞をいただきましたのも、これまで御薫陶いただいた諸先生・諸先輩方、共同研究の成果を共著論文として執筆下さった皆さん、科研費補助金基盤研究などにおいてご一緒に研究を遂行して下さいる皆さん、そして常日頃輪講やワークショップにおいて啓発的、知的な刺激を与えて下さる同僚の先生方のお陰です。この場をお借りして心から御礼を申し上げます。さらには後輩あるいはかつての院生で、現在は教育者・研究者としてご活躍されている皆さん、現役の院生の皆さんからは、いつも若さに溢れた新鮮な学問的息吹を感じております。これらの方々にも感謝しております。

大学院生時代は自己回帰移動平均モデル (ARMA モデル) など、観測値間の相関が時間差の増大とともに迅速に0へ収束する短期記憶モデルの理論を勉強していました。1980年に博士課程を修了しましたが、しかしその時点では短期記憶モデルに関する理論的課題はほぼやり尽くされたという印象を持ちました。次に何を研究テ

マにしようか悩み、暗中模索しておりましたが、そんな折に出会ったのが、Granger and Joyeux が Journal of Time Series Analysis (1980) において、またほぼ同時期に Hosking が Biometrika (1981) において提唱した長期記憶モデルです。Granger は計量経済学者で、後に共和分分析などの業績が認められ2003年ノーベル経済学賞を受賞しました。一方 Hosking は、当時イギリスの水文学研究所に所属していました。全くの異分野から長期記憶モデルが提案されたことに、このモデルが潜在的に持っているであろう幅の広さと大きさを感じました。色々迷った挙げ句、「このモデルに賭けてみよう」と決心し、本格的な勉強を開始しました。幸い成果をまとめたいくつかの論文が雑誌に掲載され、それが今回の受賞に実を結んだと思います。

少し脱線しますが、その当時私は30代の助手、助教授の頃で、今ほど学内の様々な業務に追われることもなく時間的な余裕があり、じっくりこのテーマに取り組むことが出来ました。また日本もいわゆるバブルがはじける前の元気澁刺でおおらかな時代だったと思います。それに比べ、現在は俗に「失われた20年」と言われ、世の中全体がせかせかと余裕を失い、学問に対しても、短兵急な短期的成果を求め過ぎる気がします。また大学院重点化および高齢化・少子化の影響で若手研究者に対するポストが我々の若い頃に比べ著しく減少していると思います。若い人達が、就職や経済的な不安を感じることなく、長期的な視野に立ち、余裕を持って研究に専念できるような環境を作り上げていくことは、私を含めシニア達の重要な責務の一つであると考えます。

研究の話に戻りますと、現在は上述の基盤研究などを通して、時系列解析を一般化した時空間統計解析の研究に取り組んでいます。すべてのデータは時空間データです。疫学・環境学・経済学など様々な分野の時空間データ解析に貢献できるような研究を成し遂げることが今後の望みです。

最後に、私のもう一人の恩師である国沢清典先生に御礼を申し上げます。先生は、私が大学4年生の時、卒業研究のテキスト、Box and Jenkins 著

Time Series Analysis: Forecasting and Control を通して時系列解析の醍醐味を初めてお教えくださいました。残念ながら本年8月11日にご逝去され、今回の受賞報告は間に合いませんでしたが、少しは先生の学恩に報いることが出来たのではと思っております。先生のご冥福をお祈り申し上げます。

[3] 受賞のことば

藤井 光昭 (中央大学)

このたびは日本統計学会から「日本統計学会賞」をいただくというお知らせをいただき、思いもかけないことでびっくりしました。大変伝統ある賞を私のようなものが頂戴することになり、恐縮すると同時に大変光栄に存じます。

会報担当の根本二郎先生から、会報用の「受賞のことば」を書くようにとのご指示を受け、今までを振り返ってみると、多くの優れた先生や先輩、友人の皆様方、また研究室の優秀な学生の皆さんから多くのことを教わったり刺激を与えていただいたりして、大変幸せであったとつくづく感謝しているしだいです。また日本統計学会にも同様に感謝申し上げなければなりません。

将来「統計」の研究に携わりたいという希望のもとで大学、大学院で確率過程（特に定常性をもつもの）を専攻し、統計数理研究所に入所後、時系列解析の勉強を始めました。其の頃時系列解析の研究をやっておられたのが赤池弘次先生で、いろいろご指導いただいただけでなく、いろんな相談にもものっていただきました。その赤池先生のご活動をお手伝いするなかで、船の運動や海洋波の分析をやっておられた川島利兵衛先生（当時、北海道大学水産学部教授）から「気象分野で、高橋浩一郎先生による自己相関の簡略計算法というのがあるが、統計学的にこれはどうなのか」というご質問をうけ、最初一晩ぐらい計算すれば川島先生にお答えできるのではないかと取りかかりましたが、いろいろ統計学的に興味ある事柄が出てきて研究を進展させ、私にとっては最初の長期の研究になり、博士論文としてまとめることが出来ました。高橋先生のアイデアは物理学的な発想に基

づくものですが大変興味あるもので、渋谷政昭先生も別の面から研究を進められ、たしかご一緒に気象庁の高橋先生にお話をうかがいに行ったのを思い出しています。

その後、時系列のモデルのあてはめや、高次モーメントを用いてのモデルの決定法、非定常時系列の予測法に関するものなど、研究室の学生の方などと研究をすすめ、単著論文または共著論文として発表することが出来ました。

Colorado State University におられた Peter J. Brockwell 教授とは専攻分野も近く、時系列解析の日米セミナーで知り合いになり、東京工業大学にお招きしたり、また私も米国を訪問した際 Colorado State University に招いていただいたりして大変親しく長い交流が続いております。

同教授が東京工業大学に滞在されていたときに、「時系列が確率微分方程式モデルに従っているときそれを一定時間間隔で読み取ったものは離散時間の ARMA モデルに従う」が成り立つのか、また逆に「一定時間間隔で読み取って得られた時系列が離散時間の ARMA モデルに従っているときそれは連続時間の確率微分方程式で表される時系列を離散時点で読み取ったことになっている」が成り立つのか、という問題を研究しておられました。それまでこのような問題にはあまり関心が無かったのですが、熱心な同教授のお話を伺っているうちに興味をもち、また金融データを分析する際に日単位で得られるデータなどは離散時間の ARMA モデルを用いて分析した方が扱いやすいのではないかと漠然と思っていたこともあり、同教授のお話を伺いながら自分でも少し考えてみました。これが思いもかけず深入りする結果になってしまいました。いろいろ文献を調べてみたら、多くの方々が関連した論文を発表しておられて歴史ある研究テーマであることを知りました。

しかし、今までの関連文献を調べる限り上記で述べた逆の命題に関しては、次数が 1 とか 2 といった場合について断片的にしかもケースバイケースの形で論じたものがほとんどでした。私はもう少し一般的に、そして何らかの時系列の構造と結びつけた形でこの問題を解決できないものかと考えました。いろんな方法を試みましたがうまくいかず試行錯誤の末、ARMA モデルの係数と随伴方程式の解を用いたある特性量を用いてある程度一般的な解答を出すことができ、Journal of Time Series Analysis に発表することができました。

東京工業大学、大学入試センターを退職後、中央大学でお世話になることになり、丁度同大学では暗号に関する 21COE のプロジェクトの申請が始まるところで、代表者の辻井重男教授、杉山高一教授にお誘いいただき私も加えていただきました。杉山高一、鎌倉稔成、渡邊則生の各教授、竹田裕一研究員（当時）らとともに統計グループは暗号に用いる乱数の検定法や信頼性等の分担課題を担当することになりました。暗号に関する分野ではこの分野で用いる乱数の乱数性の検定法について、米国において論文 NIST SP-800-22 で提案されている方法がよく用いられているのを知りそれを検討することからはじめました。提案されている方法のなかには統計の研究者にとってあまりなじみのないものもあり、最初は軽く考えていましたが少し統計学的に研究を進めてみると、いままであたりまえと考えていた概念の再検討に直面したり、なじみのなかった方法にも統計学的に興味あるアイデアが含まれていたりして、統計グループの一員として興味をもって研究を進め、現在も続いています。まだまだ統計の研究者が貢献したほうが良いと考えられる分野がすぐ近くに多くあることをあらためて感じています。

5. 第 6 回日本統計学会統計活動賞について

5.1 日本統計学会統計活動賞

美添 泰人（日本統計学会会長）

日本統計学会統計活動賞は、研究や教育に限らず、広く統計学および統計の分野において高く評

価値を顕彰するために2005年度から始められたものです。第6回受賞者は

椿 広計 氏（統計数理研究所）

に決定いたしました。受賞者には、賞状と賞牌が贈呈されました。受賞理由と略歴は以下のとおりです。

受賞者氏名：椿 広計 氏

略 歴：1982年 東京大学大学院工学系研究科計数工学専攻修士課程修了，1982年 東京大学工学部計数工学科助手，1987年 慶應義塾大学理工学部数理科学科専任講師，1997年 筑波大学社会工学系助教授，2000年 同教授，2001年 同ビジネス科学研究科教授，2005年 統計数理研究所リスク解析戦略研究センター長（併任），2007年 統計数理研究所データ科学研究系教授，2010年 統計数理研究所副所長。

受賞理由：椿氏は、今後の新しい研究組織の形態である Network of Excellence (NOE) を、リスクを巡る問題解決のために構築するにあたって中心的な役割を担い、NOE 組織構築の先駆けを果たした。また工業標準化国際規格の開発に長年にわたり中心的役割を担い多大な貢献をしてきた。これらの活動は顕著であり顕彰するに相応しいものである。

同氏は、2005年に統計数理研究所においてリスク解析戦略研究センターの設立に貢献し、その後、医薬品・食品安全性、環境リスク、防災、ファイナンスなど広範な分野のリスクの問題を統合的に捉えることを可能とする統合リスク科学の確立を目的に精力的に活動してきた。この取り組みの特徴は、リスクを巡る問題のための統計的方法論の確立と具体的な問題解決を目指しただけでなく、関連領域間の知識移転と融合研究を推進する画期的な構想であるハブ型の研究組織「リスク研究ネットワーク」という NOE を構築したことにある。このような NOE 型の研究組織は、新しい共同利用システムとして、また現代的諸課題の解決における統計科学の中心性・必要性を明らかにした点でも重要であり、今後の研究組織のモデルとなり

つつある。

同氏はまた、工業標準化事業においても、S0/TC69（統計的手法）、TC176（品質管理および品質保証）、TC207（環境マネジメント）などの分野において、ISO 国際規格、JIS 規格の開発に長年にわたり中心的役割を担い大きな貢献をしてきた。

主要業績：

1. 椿広計・大野忠士（2008）. 定量的リスク評価と定性的リスク評価との架橋－定量的リスク評価モデル当てはめにおける質的選択モデルの役割－, 計量生物学, Vol.29, Special issue 2, S133-S141.

2. 椿広計・藤田利治・川村敏彦・金藤浩司・川崎能典（2008）. 定量的リスク科学創生をめざして－統計数理研究所・リスク解析戦略研究センターとリスク研究ネットワークの活動－, クオリティマネジメント, 59 (7), 72-80.

3. 椿広計・川村敏彦（2008）. 設計科学におけるタグチメソッド－パラメータ設計の体系化と新たな SN 比解析－, 日科技連出版社.

4. 受賞歴

（財）日本規格協会標準化文献賞奨励賞（1996）、経済産業大臣表彰（標準化功劳）（2008）、日経品質管理文献賞（2009）。

5.2 受賞のことは

椿 広計（統計数理研究所）

今回の日本統計学会統計活動賞受賞は、私の「リスク研究ネットワーク」という NOE (Network of Excellence) 活動と「標準化活動」との2つの活動を評価して頂いたものと伺いました。以下、これらの活動について折角の機会ですので紹介させていただきます。

前者は、「リスク研究ネットワーク（会長：宮本定明・筑波大学大学院システム情報工学研究科リスク工学専攻教授）」設立並びに、事務局を務める統計数理研究所リスク解析戦略研究センター（副センター長：藤田利治教授，コーディネータ：

松井茂之教授、川崎能典准教授、金藤浩司准教授、河村敏彦助教)の活動が評価されたとのこと。そもそも、2005年に、世に先駆けてNOEが統計科学の発展にとって必須の活動と察知され、小生にリスク科学NOE形成を命じられた北川源四郎統計数理研究所長の卓見こそ、本来この賞に相応しいものです。

統数研がこの種のチャンスを与えて下さったのは、私が応用統計家として、医学、工学、環境、ビジネス、公的統計など比較的多く分野と交流してきたことに期待されたのだと想像します。現在、リスク研究ネットワークは、大学、研究機関、学会、NPOなど現在40組織が加入する組織となりました。私もNOE活動の中で、これまでお付き合いのなかった研究者や研究領域と交流できたことは新鮮な驚きでした。特に、「定量的リスク科学創生」活動の中で、リスクの予兆同定、関連情報の系統的収集と蓄積、リスク発見と検証、モデリング、最適化といったリスクに関連する情報循環を高度化すべきというアイデアを宮本NOE会長や、津本周作島根大医学部教授をはじめとするソフトコンピューティングや発見科学の研究者の方々と真摯に構想できたことは喜びでした。この新たな情報学構想は、サービス科学など多様性、複雑性、不確実性を有する多くの設計科学領域のエンジンになるのではないかと期待しています。

次にNOE活動で特筆すべきは、環境化学物質のリスクマネジメントや食品安全リスクマネジメント分野の研究者と新たに交流ができ、それらの方々が抱える統計的問題について認識できたことを挙げたいと思います。今後もNOE活動を通じて、諸学術分野に必要な統計的方法と、統計的考え方を必要とする新たな学術分野を探索し、統計関連学会とのパイプを形成できればと考えています。今回の受賞を機会に日本統計学会員と皆様方が交流する諸分野の研究者の方々とも、ネットワークの輪を広げられればと考える次第です。

さて、次に私の学生時代以来の「標準化活動」という部分を評価していただいたことについて、諸先輩の活動と共に紹介させてください。私が、

(財)日本規格協会の(統計的)JIS品質管理用語標準化の委員会(委員長:朝香鉄一東大名誉教授)に故奥野忠一東大教授の代理で出席したのは、学部卒業翌年でしたから1980年だったと思います。

その後1年ほどして、国際標準化機構の第69技術委員会(ISO TC69)「統計的方法の標準化」の国内委員会(当時は、故石川馨教授が委員長、第2代委員長が奥野先生、現在が尾島善一東京理科大学教授)のメンバーになった筈です。当時、奥野先生は統計的推論に関するSC2(第2小委員会)を担当されていました。私はSC2で、故藤野和建先生(当時長岡科学技術大学、その後東京大学教授)の計算をお手伝いするために標準化活動に入ったのです。Mid P値に基づく二項比率信頼区間構成用数表をデザインした際には、藤野先生に褒めて頂き大変励みになりました。その意味で藤野先生の夭折は本当に残念なことでした。以下で紹介する私の標準化に対する活動は、本来奥野先生が標準化活動を託していた故藤野先生が行うはずであったものと強く感じているのです。

1985年9月には、第10回ISO TC69総会が、初めて日本で開催されました。奥野先生、藤野先生はSC2に参加するので、私は管理図法(SC4)の規格原案審議に故大場興一東京理科大学教授と共に参加しました。これが私のISO総会デビューでした。その後、1990年のロンドン総会に「測定法の不確かさ(SC6)」に参加して以来、かなりの頻度でTC69総会や中間会合に参加しました。2009年12月には、この3年間提案活動を続けてきた、ISO TC69 SC8「技術開発加速のための統計的方法ないしはその関連技法」設置が国際投票で承認されると共に、日本が幹事国に私も小委員長に選出されました。日本は既にSC6(精度評価)国際委員長を尾島先生が長年担当していますので、米国と共にTC69の2つの小委員会を動かす立場になったのです。SC8では、顧客の声を収集する調査、それを実現する技術モデルを選択する方法(QFD, Quality Function Deployment)、技術モデル上での価値最適化技法(田口メソッド、ロバストパラメータ設計)の国際標準原案が作成されます。

顧客満足度調査に決定的な役割を果たした狩野紀昭先生（アメリカ統計学会デミング Lecturer）、国際学会や赤尾賞も設置された赤尾洋二先生の QFD、1990年代のマイクロソフトブックシェルフ（英語版）の「実験計画法」欄で R.A. Fisher の後継者とされ、米国で田口賞が設置された田口玄一先生（日本統計学会賞受賞者）など、わが国の設計品質改善への先人の寄与は国際的に高く評価されています。SC8で日本が幹事国になれたのも、先人の活動のおかげです。

ISO 規格は、決して完璧なものではありません。統計関係の JIS 規格に比しても、完成度は劣ります。その意味で、石川先生、朝香先生、森口先生らが、わが国の産業発展を目指し苦心し1950年代から制定してきた JIS 統計規格群を ISO 規格の翻訳に置き換えた1990年代後半の国際整合化事業は辛いものがありました。当時廃止した JIS の「規準型抜取検査」規格が、最近別の国から国際提案されるという悔しいことも起きています。日本の産業界が統計的方法を世界に先駆けて利用してきた実績は、最近の国際標準化の中でも十分主張できるようになってきたと思いますし、日本工業規格が ISO 規格となるという途も徐々にではありますが開けています。例えば、2010年2月には、ISO28640「確率変数の生成」が発行し、この中には統数研の物理乱数発生技法などを織り込むことが出来ました。これも故森口繁一東大名誉教授が中心となり、1950年代に世界に先駆けて乱数生成、ランダム抜取、ランダム割り付けの JIS 規格を制定していたことが背景にあります。

さて、私は TC69 以外でも、ISO TC207（環境マネジメント）、TC176（品質マネジメント）、IEC TC111（電気電子製品の環境配慮）を担当してきました。TC207では、環境マネジメント用語の概念整理を国際 WG で担当すると共に、「製品規格の環境配慮」の国内小委員会の責任者、TC176では、品質マネジメント 8 原則のエンハンスメントというタスクフォースの国際リーダーをさせていただきました。最後の IEC については、国内委員会の立ち上げを行い初代委員長も引き

受けました（現在：山田秀筑波大教授が委員長）。これら 3 つの分野は直接統計とは関わりませんが、各国ともこれらの作業に結構統計家を派遣しています。マネジメントシステム規格の基本原則には「事実に基づく管理」ということが厳然と打ち出されているからです。こうしたこともあり、宮津隆帝京科学技術大教授（SC6 国内委員会元委員長、藍綬褒章もその後受賞）、尾島先生に続いて、2008年には25年以上標準化活動に従事したことを経済産業大臣から表彰して頂きました。ただ、統数研 NOE 活動が比重を占めた現在、TC207、IEC TC111 設立以来の活動は辞任しました。

TC69 以外の活動に参加したとき、若干驚いたのは、各国の利害関係が顕著であり、標準化活動が産業界の支援もあり、潤沢な予算が配分されていたことです。残念ながら TC69 の活動は、国際委員会に十分なエキスパートを派遣する予算を各国とも持っていません。多くのエキスパートは、自分の研究費で TC69 総会に参加しています。私は、幸運にも1990年代は日本規格協会の支援で TC69 に参加できました。しかし、当時、宮津先生は、ご自身の研究費を割いて出席され、私ども若手が TC69 に出席できるように配慮されました。ネイティブに伍して、如何に日本の意見を通して行くかというノウハウも、宮津先生から教わったことが多かったのです。それにしても、標準化を支える産業界の統計専門家層がこの国には決定的に不足しています。長年 ISO TC69 に参加してきた、尾島委員長（SC6）、仁科健名古屋工業大学教授（SC4）、加藤洋一統計数理研究所客員教授（元 NTT, SC5）、鈴木知道東京理科大准教授（SC6）も私も、統計の研究者としてではなく、各国同様統計実務家として TC69 に貢献したつもりです。ただ、日本の統計実務家層、専門家層を米国・英国・フランス・インドのように広げなければならないと強く感じています。統計専門家層の形成については、先の NOE 活動を今後発展させる場合でも、深刻な問題になると思う今日この頃です。

2011年6月には統計数理研究所で、日本では

4回目となる第34回総会を開くこととなります。1985年東京総会からのメンバーでまだ活動しているのは、尾島先生と加藤先生と私位でしょう。この原稿を書いている最中に、TC69国内委員会から日本統計学会にエキスパート派遣の依頼状が送られると言う話が届き、来年の日本総会に参加される次世代統計家が現れることを期待しています。

以上、最近の活動である NOE と学生時代から

の活動である標準化について、日本統計学会が評価して下さいたことに心から感謝申し上げますと同時に、これが、私のこれまでの活動を支えて下さった恩師、先輩と同僚の指導・支援の賜物であることを改めて強調し、私自身も諸先輩の業績に恥じない活動を続けることを誓い、本稿を閉じさせて頂きたいと思います。

6. 第6回日本統計学会統計教育賞について

6.1 日本統計学会統計教育賞

美添 泰人（日本統計学会会長）

日本統計学会統計教育賞は、統計教育の研究および実践において、顕著な業績をあげた個人または団体を顕彰するために2005年度から始められたものです。第6回受賞者・受賞団体は

財団法人日本規格協会・財団法人日本科学技術連盟

中本 信子 氏（筑波大学附属中学校）

に決定いたしました。受賞者・受賞団体には、それぞれ賞状と賞牌が贈呈されました。授賞理由と受賞者・受賞団体の略歴等は以下のとおりです。

[1] 受賞団体：財団法人日本規格協会・財団法人日本科学技術連盟

受賞活動：財団法人日本規格協会及び財団法人日本科学技術連盟による品質管理検定制度の運営実施と普及活動

略 歴：財団法人日本規格協会

1945（昭和20）年12月に、工業標準化及び規格統一に関する普及並びに啓発等を図り、技術の向上、生産の効率化に貢献することを目的として設立された経済産業省所管の財団法人である。

現在はQC検定を初め、JIS原案の作成、JIS規格票の発行と普及、海外規格の提供、教育研修、標準化に関する技術相談、さらに国際標準化活動、ISOマネジメントシステムに関する審査・登録及

マネジメントシステム審査員の評価登録などの事業を展開し、工業標準化と品質管理の普及発展に取り組み、わが国の産業経済の発展、国民生活の向上、国民の福祉の増進に寄与してきた。

略 歴：財団法人日本科学技術連盟

1946（昭和21）年5月に、産業界に役立つ経営管理技術の開発と普及を目的に設立された文部科学省所管の財団法人である。

設立から60年以上にわたり、品質管理を中心とした教育・研修事業に取り組んでいる。同時に、デミング賞、日本品質管理賞などの創設や、職場の改善活動の核となる「QCサークル活動」の普及と支援、さらにISOマネジメントシステムに関する審査・登録及び研修、各種大会、シンポジウムなど様々な活動を通して、わが国の産業界の発展並びに企業体質の強化に寄与してきた

[2] 受賞者氏名：中本 信子 氏

略 歴：1992年東京学芸大学教育学部中等教育教員養成課程数学科卒業、1994年筑波大学大学院修士課程教育研究科数学教育コース修了、1994年千葉県立幕張東高等学校（現幕張総合高等学校）講師、1995年愛国学園短期大学（現愛国学園大学）附属四街道高等学校教諭、1998年和洋国府台女子高等学校教諭、2003年東京学芸大学附属竹早中学校教諭、2008年筑波大学附属中学校教諭、現在に至る。

受賞理由：中本信子氏は、日本数学教育学会およ

び日本科学教育学会において中等教育学校の教育カリキュラムに関わる研究発表を継続して行うなど、実験・観察・操作活動を重視した授業の開発および数学的モデル化教材の開発や中等教育学校の数学科カリキュラムの研究を行っており、統計教育においてもデータや資料の見方や考え方を中心として指導することに重点をおいた実践研究に取り組み、多くの研究業績を有している。また日本統計学会統計教育分科会主催の第6回「統計教育の方法論ワークショップ」において“公表された統計資料を読み取り、分布の意味理解に基づいて生徒が自らデータを分析・考察し、結論を導く”ことを目指した授業実践の内容が高く評価され、最優秀賞を獲得した。本発表内容は、日本教育新聞においても大きく取り上げられ、新しく昨年度より始まった「資料の活用」領域での授業モデルとして、全国の中学校教師に配信された。

6.2受賞のことは

[1] 受賞のことは

飯塚敏之

(日本規格協会 品質管理検定センター)

このたび、財団法人日本規格協会及び財団法人日本科学技術連盟が実施している「品質管理検定(QC検定)制度の運営実施と普及活動」が、「第6回日本統計学会統計教育賞」という権威ある学会賞を受賞させていただき、主催団体として大変光栄に存じております。この受賞は、ご推薦いただきました先生方、また、吉澤正 品質管理検定運営委員会委員長(筑波大学名誉教授)をはじめ多くの関係者の方々、並びに多くの関係団体・企業・学校等のご支援のたまものであると感謝申し上げます。本稿では、以下でQC検定(URL:<http://www.jsa.or.jp/kentei/qc/qc-top.asp>)の取り組みについて報告させていただきます。

QC(Quality Control)検定制度は、日本のものづくり力の再生を品質管理(統計手法を含む)の側面から支援することを目的として、国内の著名な企業、関連団体にご賛同いただき、またQCの有識者・実務者・専門家で組織する(社)日本品

質管理学会の認定(2005年4月)を受けて創設されました。

本検定は、制度を普及させることで、個人のQC意識の向上、組織のQCレベルの向上、製品・サービスの品質向上を図り、産業界全体のものづくり・サービスづくりの質の底上げに資することを狙っています。

本検定を一言で説明すると、『組織(企業)で働く人に求められる品質管理の「能力」を4つのレベルに分類し、各レベルの能力を発揮するために必要な品質管理の「知識」を筆記試験により客観的に評価するもので、基準点に達した方には、合格証(全員)・認定カード(オプション)を発行し、品質管理の知識レベルの認定を与えるもの』です。

品質管理という言葉を使うか否かは別として、日本のほとんどの組織(企業)では、品質管理が実施されています。この品質管理を実施するためには、そこで働く人々の品質管理に関する意識や問題解決能力(改善能力)が重要です。この問題解決能力(改善能力)といった能力を発揮するためには、品質管理の知識だけではなく、個人のリーダーシップ力やモチベーション、それらを引き出す組織体制などといった多くの要素が関係しますが、一番の基本となるのはやはり「品質管理に関する知識」です。また、品質管理の知識といってもどのような問題を解決するのか、その解決レベルをどこに設定するのか(どのような改善レベルに取り組むのか)によって、必要となる知識は異なるものです。

そこで「QC検定」では、組織(企業)で働く人の、仕事の内容(どんな仕事をしているのか、これからするのか)、その仕事において品質管理(問題解決、改善)を実施するレベルはどれくらいか、さらにその品質管理を実施するためにはどれくらいの「知識」が必要であるかによって4つの級を設定し、「品質管理検定レベル表」としてホームページ(URL:<http://www.jsa.or.jp/kentei/qc/qc-2-1.asp>)で公開しています。品質管理検定センターでは、このほかに4級テキストの公開、公開資料

(過去問題を含む)の活用促進、全国各地での検定実施、学生・生徒に対する統計教育を含むQC学習の支援、関連組織の支援など、QCを学習しようとする、または学習を支援する個人・組織に対して、情報公開と支援を行っています。

なお、本検定受験者の現状(実績)は、2005年12月に第1回検定試験を実施して以来、2010年3月までの間、計9回の試験を実施し、延べ177,299人の方が受験され、現在、合格者は延べ109,104人(1~4級合計)に達しました。なお、受験者数は毎年右肩上がりの増加が続いており、2009年度には年間受験者が6万人を超え、本年9月に実施した第10回試験では、過去最多の34,136名の受験申込みがあり、累計受験者は21万人を超え、年間受験者は7万人に迫る勢いです。

本検定の利用組織(企業、学校など)のメリットとして、企業では、本検定を経営システムに取り込んだ活用、例えば、社内人材育成とリンクさせたり、人事制度(人事考課、処遇・待遇、人員配置、採用項目等)、教育制度(教育効果の把握、社内資格[リーダー、社内講師]等)や組織力(現場力)評価項目などに活用されています。また、学校では、工業高校での品質管理教育の取り組みに活用するなど、それぞれの組織が有効に利用されています。

主催団体としては、本検定制度が産業界で働く方々の品質管理(統計手法を含む)の能力を継続的に向上させる産業基盤となるよう、今回の受賞を機に、さらに普及・定着活動に積極的に取り組んで参りたいと考えておりますので、今後とも関係各位のご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

[2] 受賞のことは

中本 信子(筑波大学附属中学校)

このたびは統計教育賞を授与して頂き、大変光栄に感じております。また、色々な面でご指導頂きました先生方に心から感謝申し上げます。中学校現場での授業を通した取り組みと、その実践報告が評価されることを嬉しく思うとともに、今後

の活動に向けての大きな励みになりました。

私は中学・高校のときに少し統計を学んだ世代ですが、そのときは、与えられたデータを整理して図表やグラフに表したり、代表値を求めたりすることを目的とした知識習得型の授業であったと記憶しています。

新学習指導要領においては、中1の「資料の活用」のねらいには以前の指導要領の目標とは異なり、「与えられたデータを整理して図表やグラフに表す手法を学ぶにとどまらず、身近な事象に関する問題意識に基づいて、児童・生徒が自らデータを収集し、整理・分析し、その結果に基づいて意思決定や判断をする」ことがあげられています。私の実践は、そのねらいを実現させるために、生徒の身近な事象に関する問題意識に基づいたデータ、それも架空のデータではなく実データを活用した授業の一例です。

具体的には、昨年末に公表された「貧困率」の話題を取り上げ、政府公表の実データをヒストグラムに表し、その分布の状況について考察し、日本経済混迷の状況を実データをもとに考察させていくというものであり、今年3月に行われた統計教育のワークショップで「実データをもとに現実事象を考察させる授業実践～国民生活基礎調査のデータから所得の分布傾向を考える～」というテーマで発表させていただきました。特に「貧困率」を取り上げた理由は、今まで主に代表値として平均値が目立ってきたのですが、「貧困率」(相対的貧困率)の指標は中央値を基準にしているという点に着目したからです。

教材の開発過程では、政府公表のデータをいかに扱うか、データの分布の傾向をいかに考えさせるか、代表値をいかに扱うかという点に焦点を当てました。また、理想の分布についても考察させ、生徒達による討論も行いました。

先にも述べましたが、この実践は、現実社会の状況を実データから読みとく力、身近な事象に関する問題意識に基づいてデータを整理・分析し、その結果に基づいて意思決定や判断をするという新学習指導要領のねらいを実現させることを意図

したものであり、このような視点で教材を開発していくことは生徒の統計的思考力を育む上で大変重要なことであると感じております。実際、授業後の生徒の感想にも、「今回の授業は、現在の社会を数学的に考えていくというもので、とても興味を持てたと思う。現実のデータから考察していくと意欲も持てるし、社会を見る目も養われるので良いと思った。」と述べられており、授業を通して、実データに基づいて考察することの有用性が感じられたと評価しております。

この教材の開発過程ではかなりの時間と労力を費やし、改めて生徒の問題意識に基づくデータを収集したり、実データをもとに授業を構成することの難しさを実感致しました。

このような授業実践は大切ではありますが、実際、現場の先生方が今後このような実践を行っていくにあたり、私と同様な点に苦勞されるであろうと思われます。このような困難さゆえ、統計が、以前のような知識習得型の内容の復活になるのではないかと危惧しています。そのためにも、現場の先生方に実データや授業モデル等の提示をWEB上で公開するなど、積極的に情報提供を行っていく必要性を強く感じています。

幸いにも、昨年1年間、総務省統計局において「統計局ホームページを通じた統計教育の拡充に関する懇談会」の委員を務めさせて頂く機会をいただき、微力ながらも統計教育に貢献できたことを本当に嬉しく思っております。

企業で最も必要とされる数理的な知識・技能は統計的思考力であるといわれています。先日、JSTの統計教育の講習会に参加し、企業における品質管理や企業における様々な問題を解決するための手法として、統計的問題解決の手法が利用されていることを知り、改めて、初等・中等・高等教育段階で、社会生活でデータを活用し、情報を批判的に読み解く力を育成することの重要性を実感いたしました。実際、現在の社会では、必要なデータを収集し、そのデータに基づいて適切に判断を行い、それに基づいて行動を決定したり、その結果を根拠として人と議論することが非常に大切です。学校の出口で生徒にこのような力が身につけているようにするためにはそれぞれの学校段階で行われるべき活動や身に付けるべきスキルや思考力を明らかにし、その育成のための適切な教材を開発することが大切です。先程も述べましたが、これは大変困難ではありますが、最も大切な作業であると思われます。

そのためには、統計領域における小学校・中学校・高等学校の各校種における算数・数学科のカリキュラムの構成と接続の問題や、教室での学習指導の具体的な在り方などを実践的に検討することが必要であり、今後も統計教育推進のための研究活動に励んで参りたいと考えております。

今後ともどうぞ御指導よろしくお願い申し上げます。

7. 第4回日本統計学会研究業績賞について

7.1 日本統計学会研究業績賞

美添 泰人 (日本統計学会会長)

日本統計学会研究業績賞は、統計学および関連分野において優れた研究業績をあげた研究者を

顕彰するために2007年度から始められたものです。第4回受賞者は

栗木 哲 氏 (統計数理研究所)

下平 英寿 氏 (東京工業大学)

に決定いたしました。受賞者には賞状と賞牌が贈呈されました。授賞理由と略歴は以下のとおりです。

[1] 受賞者氏名：栗木 哲 氏

略 歴：1982年 東京大学工学部計数工学科卒業、1984年 東京大学大学院工学系研究科修士課程修了、1984年 日本電気株式会社入社、1987年 東京大学工学部計数工学科助手、1993年 信州大学工

学部情報工学科助教授, 1995年 統計数理研究所助教授 (総合研究大学院大学助教授併任), 2005年 統計数理研究所教授 (総合研究大学院大学教授併任)

受賞理由: 分布近似におけるチューブ法は, 従来多変量解析において研究されてきた特殊関数を用いた精密分布論とサンプルサイズに関する漸近理論とは異なる方法であり, 数値計算も容易かつ裾確率の近似に関して高い精度を持ち, 統計分布理論に新しい息吹をあたえている. 漸近分布論における積分幾何的な新しい方法論と実用性を示した一連の研究は価値あるものであり, 国際的に高く評価されている. さらに, 多変量解析および連続離散多次元データのモデリングと解析, 遺伝連鎖解析における統計的方法など, 統計理論とその応用に関する幅広い分野で貢献をしており, その業績は誠に顕彰するに相応しいものである.

主要業績:

1. S. Kuriki and A. Takemura (2008) The tube method for the moment index in projection pursuit. *Journal of Statistical Planning and Inference*, Vol.138, 2749-2762.
2. S. Kuriki and A. Takemura (2008) Euler characteristic heuristic for approximating the distribution of the largest eigenvalue of an orthogonally invariant random matrix. *Journal of Statistical Planning and Inference*, Vol.138, 3357-3378.
3. 栗木哲 (2008) QTL 解析の統計モデルと検定の多重性調整, 「21世紀の統計科学 II」, 東京大学出版会, 315-356.
4. S. Kuriki (2005) Asymptotic distribution of inequality-restricted canonical correlation with application to tests for independence in ordered contingency tables. *Journal of Multivariate Analysis*, Vol.94, No.2, 420-449.
5. S. Kuriki (2010) Distributions of the Largest Singular Values of Skew-Symmetric Random Matrices and their Applications to Paired Comparisons. *Communications in Statistics - Theory and Methods*, Volume 39 Issue 8 & 9, Recent Advances in Statistical

Inference—In Honor of Professor Masafumi Akahira, 1522-1535

[2] **受賞者氏名:** 下平 英寿 氏

略 歴: 1990年東京大学工学部計数工学科卒業. 1995年同大学院工学系研究科博士課程修了. 同年日本学術振興会特別研究員. 1996年統計数理研究所予測制御研究系助手. 2002年東京工業大学情報理工学研究科講師. 2005年同助教授. 2007年同准教授, 現在に至る.

受賞理由: 下平 英寿氏は「マルチスケール・ブートストラップ法」を提案し, 分子生物学の検定の問題にこの方法を適用して多大な影響を与える業績を挙げている. 従来のブートストラップ法に対して複数回, 異なるサイズのブートストラップ・サンプリングすることで確率値の推定精度の向上が図られている. 情報幾何の方法によって非常に明快な証明が与えられている. 対象論文 1 は境界が錐のような滑らかでない場合にマルチスケール・ブートストラップ法を拡張したものである. 対象論文 2 は両側検定を含む一般的な仮説検定にマルチスケール・ブートストラップ法の適用対象を拡大したものである. これらの論文で明らかにされた成果は日本統計学会における優れた研究業績として強く推薦されるものである.

主要業績:

1. Shimodaira, H. (2008). Testing regions with nonsmooth boundaries via multiscale bootstrap. *Journal of Statistical Planning and Inference*, 138, 1227-1241, 2008.
2. Shimodaira, H (2010). Frequentist and Bayesian measures of confidence via multiscale bootstrap for testing three regions. *Annals of the Institute of Statistical Mathematics*, 62, 189-208.

7.2 受賞のことば

[1] **受賞のことば**

栗木 哲 (統計数理研究所)

このたびはこのような賞をいただくことができ, 本当に光栄に思います. 学生, 助手時代を過ごし

た東京大学でご指導いただいた広津千尋先生をはじめとする先生方、また現在の職場である統計数理研究所で日頃より輪読、ゼミ、研究討論、共同研究をしていただいている同僚、元同僚、学生の方々に感謝いたします。とりわけ今回の賞は主として「チューブ法」にまつわる業績を認めていただいたものと思いますが、この方法論は東京大学の竹村彰通先生と共に10数年来研究をしてきたもので、先生には深くお礼を申し上げたいと思います。

このチューブ法ですが、その目的は確率過程、確率場の最大値の分布を求めるためのものです。添字集合をリーマン多様体と考え、その幾何量(内点の体積、境界の体積、オイラー標数など)を評価することを通して、最大値の分布を記述するというものです。統計学への応用としては、ウィシャート行列などのランダム行列の最大固有値の分布や、変化点検出、多重比較のための最大値型の統計量の分布を求めることができます。これらの分布は、より一般には我々が特異モデルとよんでいる非正則な統計モデルの尤度比統計量ととらえることもできます。(「特異モデルの統計学」, 福水・栗木他, 岩波, もご参照ください。)

皆様ご存知のとおり日本では輝かしい多変量解析の歴史があり、現在でも業績を上げている先生方が多くいらっしゃいます。チューブ法もその流れのものであり、少なくとも個人的には多変量解析の一分野としてそれらへの応用を念頭におき研究してきました。しかし先に述べましたように、行列変数特殊関数を用いる精密分布論やサンプルサイズに関する漸近論とは違った毛色の変ったものです。数学の手法としては、今回同じ賞を受賞された下平さんのマルチブートストラップとも通じるものがあります。多変量解析は歴史が長い故になかなか新しい話題を見つけにくい分野と感じている若い方も多いと思います。チューブ法は、伝統的な意味の統計数学ばかりでなく、幾何的手法など幅広い数理を用いる分野であり、また多重比較などへの応用可能性も広いものです。極端に難しくまた簡単にもすぎず、ある意味では手ごろな研究分野ともいえますので、多くの方に興味を

持っていただきたいと思います。

ところでいまから思うと、研究のひとつの節目は、10年ほど前になりますがキースワースレイ先生が統数研へこられ、お会いできたことだったと思います。当時先生は、オイラー標数法 (Euler characteristic heuristic) を確立され、それを fMRI 画像データ解析の信号検出問題に適用されていました。統数研滞在のホスト教員は尾形良彦先生でしたが、尾形先生に強引に場を設定される形で1、2時間話をする機会を持ちました。この先生については、当時は難しい話をする方という印象しかなかったのですが、話をすると非常に親切な先生であり、その時の議論やその後のセミナーを通してオイラー標数法とチューブ法とが非常に関連があるということがわかりました。これがきっかけで研究が一気に見通しのよいものになったと思います。ワースレイ先生は残念ながら2年ほど前に50代半ばでお亡くなりになりました。先生のご冥福を祈りつつここに感謝したいと思います。

以上散漫になりましたが、今回の受賞を励みにこれからも研究を続けてまいりたいと思います。チューブ法は理論的な課題でありましたが、統計学は、理論、応用、数値的方法を区別せずに多くを受け入れて楽しむことができる研究分野と思っています。今後も皆様のご指導を賜り、研究に励んで参りたいと存じます。今回はどうもありがとうございました。

[2] 受賞のことば

下平 英寿 (東京工業大学)

日本統計学会業績賞の受賞という突然の知らせに驚きと喜びでいっぱいです。関係する方々にお礼申し上げます。これまで所属した東京大学、統計数理研究所、東京工業大学、海外滞在了したワシントン大学、スタンフォード大学において交流のあった方々の援助や指導のおかげであり、日本統計学会という活動の場のおかげでもあります。皆様に感謝いたします。

本研究で提案したマルチスケール・ブートストラップ法はシンプルなアルゴリズムです。サンブ

ルサイズ n のデータから乱数を用いたりサンプリングによってサンプルサイズ m の複製データを繰り返し生成します。このとき興味のある事象の頻度がブートストラップ確率です。通常は $m = n$ とすべきですが、あえて m の値を何回か変化させてブートストラップ確率を計算します。

この値を $\sigma^2 = n/m$ の関数とみなして $BP(\sigma^2)$ と書き、 $p(\sigma^2) = \Phi(\sigma \Phi^{-1}(BP(\sigma^2)))$ と変換します。ある種の正規性を仮定すると、平坦な事前分布に対する事後確率は $p(1)$ 、すなわち通常のブートストラップ確率になります。一方で、頻度論的に不偏な p -値は $p(-1)$ と形式的に書けることが証明できます。「 $m = -n$ のブートストラップ確率」と表現しても良いでしょう。マルチスケール・ブートストラップ法ではデータから計算した $p(\sigma^2)$ を $\sigma^2 = -1$ へ外挿して近似的に不偏な p -値を計算します。

スケール σ はブートストラップ分布のバラツキの程度を表しますが、 $\sigma^2 = -1$ は結果的に分布の左右を反転させて、いわゆる中心化を間接的に行ったことになります。2008年の論文では仮説境界曲面のテーラー展開の代わりにフーリエ変換を用いた漸近理論を工夫して境界が滑らかでない場合に理論を拡張しました。

サンプルサイズを変化させる m out of n bootstrap 法（または subsampling 法）は以前から提案されていますが、そこでは小さい m でブートストラップ法を実行して通常の $m = n$ へ外挿して戻します。これに対して本研究では負のサンプルサイズへの外挿という、一見して非常識な手法を提案しています。論文の査読ではこれが理解されずに批判されて門前払いということもしばしばです。このようなときはユニークな研究であることを示す良い兆候であると勝手に解釈することにしています。今回は理解されるような説明を努力するのは当然ですが、

本研究を進める上で、進化系統樹推定という生命科学の問題への応用が大きな役割を果たしました。きっかけは博士の学位論文で提案した手法を系統樹推定へ応用したことです。下平-長谷川検

定と呼ばれるこの方法は、すでに普及していた岸野-長谷川検定の多重比較版であり、直ちに広く利用されるようになりました。しかし多重比較法であるがゆえの保守性が実用上の問題であり、本当の「発見」を見逃してしまう false negative の傾向があります。一方で通常のブートストラップ確率は偽りの「発見」をしてしまう false positive の傾向があります。この両者の間にある近似的に不偏な p -値をマルチスケール・ブートストラップ法では計算しています。これらの方法に関する論文の被引用回数は自分でも驚くほど多く、良い応用分野に関わることができたと思います。

私がこのような生命科学への応用を日常的に研究していると誤解されることがありますが、実際には地道な計算や統計の方法論をコツコツ研究しており、応用に関しては短期間の経験があるだけです。しかしながら、ワシントン大学では Felsenstein 先生、統計数理研究所では長谷川政美先生との密度の高い交流に恵まれたことが本質的でした。

このような交流のなかでマルチスケール・ブートストラップ法を着想するきっかけもありました。UCL の Ziheng Yang 先生が系統樹推定のシミュレーションで正しく選択する確率を調べていて、様々な設定における結果をうまくプロットする方法についてアドバイスを求められました。そこで確率の対数や z 値をサンプルサイズに対してプロットすると予想以上に直線的になり、これは一種のスケールリング則で何か面白いことがあるはずだと思いました。その後スタンフォード大学で長期滞在中に系統樹推定の検定についてセミナーをしたところ Efron 先生に Efron and Tibshirani (1998) の論文を教えてくださいました。Yang 先生との会話から1年以上過ぎた2000年の夏、その論文とスケールリング則のアイデアが突然結びついて、マルチスケール・ブートストラップ法が生まれました。滞在中2回目のセミナーで Efron 先生にアイデアが面白いと褒めていただけたのが良い思い出です。

このように人々からの刺激に恵まれて研究を進めてきたことは幸運でした。本研究にはまだ解決

すべき問題や関連した話題がたくさんあります。興味を持ってくださる方の参加に期待するとともに、

私自身も努力を続ける所存です。

8. 第3回日本統計学会出版賞について

8.1 日本統計学会出版賞

美添 泰人（日本統計学会会長）

日本統計学会出版賞は、統計学及びその関連分野において優れた図書（研究、教育あるいは啓蒙）を出版した著者、编者、訳者あるいは出版社を顕彰するために2008年度から始められたものです。第3回受賞者・受賞団体は

株式会社 朝倉書店

に決定いたしました。受賞者・受賞団体には賞状と賞牌が贈呈されました。授賞理由と略歴は以下のとおりです。

受賞団体名：株式会社 朝倉書店

略 歴：1929年前社長朝倉鑛造により賢文館が創業。1940年鈴木梅太郎監修『農芸化学全書』全36巻の刊行を機に学術的、専門書的な農学書に重点を移した。1944年賢文館を母体に株式会社朝倉書店を設立。1948年神田錦町に社屋を新築移転、自然科学の各分野に進出し、基礎領域から医学、工学など応用科学にも出版分野を拡大。1968年現在地に社屋を新築移転、同時に『内科学』を刊行するなど、臨床医学の分野を拡充。1980年朝倉邦造が社長に就任。自然科学、人文科学の各分野を拡充するとともに、事・辞典、ハンドブックなどの大型出版物の刊行を拡大。

受賞理由：株式会社朝倉書店は自然科学を重視した大手出版社であり、近年統計学関係の単稿本の出版に尽力している。具体的には、統計学関連のシリーズを多数企画出版しており（シリーズ・多変量データの統計科学、シリーズ・統計科学のプラクティス、医学統計学シリーズ、シリーズ・行動計量の科学、シリーズ・予測と発見の科学、ファイナンス・ライブラリー）、統計学のもつ多面

性を網羅的に体系化することに成功している。特に、「シリーズ・統計ライブラリー」では統計学の最先端の内容を積極的に取り入れており、統計学の研究者が社会に対して有益な研究成果を発信する機会を創出している。このシリーズの創刊は1979年であり、これまで計30冊を出版した。このような専門性が高い出版物は、出版社にとって企画を立案し管理することに相当の技術と苦労を必要とするが、長年に渡る相当の企業努力によって困難を克服してきた。このように統計関連の出版物を通して、学者、実務家、学生が統計学を効率的に学習・実践することを支援している。よって、株式会社朝倉書店は社会に対する貢献が極めて大きい出版事業を成し遂げているといえる。

主要業績：

シリーズ・統計ライブラリー（1979～）
シリーズ・多変量データの統計科学（2009～）
医学統計学シリーズ（1998～）
シリーズ・行動計量の科学（2010～）
シリーズ・統計科学のプラクティス（2009～）
シリーズ・予測と発見の科学（2004～）
いずれも出版・刊行

8.2 受賞のことは

「日本統計学会出版賞受賞によせて」

株式会社 朝倉書店

このたび、思いがけず日本統計学会出版賞を授与いただき、光栄の至りに存じます。大きな喜びとともに、受賞に恥じない出版活動の継続へ向け身を引き締まる思いです。もとより執筆者なくして書籍は生まれず、また読者なくして出版は成り立ちません。今回の栄誉は、真の意味で日本統計学会に集われるすべての先生方のお力添えによ

るものと感謝申し上げます。

小社の統計関連シリーズは、理論的テーマをモノグラフ形式にまとめる「統計ライブラリー」を縦糸とし、データ科学、医学、行動計量学、経営工学、ファイナンスなどの応用的ないし教科書的なシリーズを横糸として構成されています。

小社が統計関連シリーズに取り組みはじめた時期は1970年代半ばに遡ります。日ごろ理工系の様々な研究者と接するなかで「統計」というキーワードを耳にする機会がとみに増え、統計的手法へのニーズがあらゆる分野で急速に高まりつつある様子が知られてきた時期でした。「自然科学の基礎学問は数学および統計学だ、という時代になる」。企画作りのために統計数理研究所や各大学に相談に通っていた当時の編集者がこう熱心に主張し、それで本腰を入れることになったのです。

もちろん小社でもそれ以前から統計学の関連書籍を刊行していましたが、それらは散発的な単行本か数学書シリーズの（たいてい最後の方の）一巻という扱いでした。このような出版のやり方の欠点は、書店でそれぞれの本が各分野の書棚に四

散してしまい、「統計学コーナー」が形成されにくいことにあります。

独立した出版ジャンルとして認知を得るには、シリーズを構築して物理的かつ不可分に書棚の一角を占拠することが有効です。こうしたシリーズ戦略の嚆矢となったのが巻数を定めない「統計ライブラリー」と、全7巻のシリーズ「現代人の統計」でした。1977年秋～80年秋の3年間に両者あわせて12タイトルを集中的に上梓し、幸いにも好評を博しました。以後、「統計ライブラリー」からは現在までに44タイトルが刊行され、多くのロングセラーが生まれています。また応用分野の各シリーズも幅広い読者にご利用いただいています。

このたびの受賞を励みに、統計学の普及・発展の役に立つ書籍の刊行にいっそう努めて参りたいと存じます。学会の先生方におかれましては、今後とも小社刊行物のご執筆とご利用をお願いできれば幸いです（現在ご執筆中の先生方にはご脱稿を楽しみにお待ちしております）。統計学ならびに日本統計学会の益々の発展を祈念しつつ、受賞の辞の結びとさせていただきます。

9. 第24回日本統計学会小川研究奨励賞について

美添 泰人（日本統計学会会長）

第24回日本統計学会小川研究奨励賞は、規定にしたがって日本統計学会会誌編集員会で選考を行い、以下のように受賞者を決定し9月7日の総会で表彰式を行いました。

受賞者氏名：奥井 亮 氏（京都大学）

受賞論文：Shrinkage GMM Estimation in Conditional Moment Restriction Models *Journal of the Japan Statistical Society* Vol.39 No.2 239-255

受賞者のことばと受賞者・受賞論文の紹介は次号に掲載する予定です。

10. 2010年度統計関連学会連合大会報告

10.1 プログラム委員会報告

プログラム委員会委員長
樫 広計（統計数理研究所）

2010年度統計関連学会連合大会は、応用統計学会、日本計算機統計学会、日本計量生物学会、日本行動計量学会、日本統計学会、日本分類学会の6学会の共催で、2010年9月5日〔日〕から8日

[水]まで、都の西北の早稲田大学早稲田キャンパスで開催されました。今回は、5日から6日にかけて、第3回横断型基幹科学技術研究団体連合総合シンポジウムも同期開催され、6日は連合大会のセッションと相互乗り入れとなり、統計関連学会以外の学会に企画して頂いたセッションもあり、大変賑やかな大会となりました。講演者、座長、企画セッションオーガナイザーの方々、そして参加者の皆さまのご協力で白熱した議論もみられ、統計関連学会以外の方々に対しても統計科学の面白さ、重要性をアピールすることができたと思います。運営面でも、実行委員会、運営委員会、プログラム委員会の3委員会による準備・運営も板についてきた気がします。私のような大雑把な人間でも、大過なく大会を終了できたのも3委員会のチームワークと早稲田大学関係者並びに委託業者さんの大きなサポートのお陰だと思えます。加えて横幹連合シンポジウムの運営関係者にも種々プログラム編成上でご協力頂いたことを報告致したいと思えます。改めて今大会を支えて下さった全ての皆様方に心から御礼申し上げるとともに、統計関連学会連合大会が日本を代表する統計の集いとして今後も発展することを強く期待いたします。

以下では、プログラム委員会が担当した企画について、各担当者から報告して頂きます。別途、運営委員会の報告、コンペティションセッション受賞者の言葉を含めて、本大会の報告とさせていただきます。

10.2 チュートリアルセッション報告

星野 崇宏 (名古屋大学)

山本 渉 (電気通信大学)

恒例のチュートリアルセッションは、昨年と同様に2つのパラレルなセッションを設定し(いずれも13:00~16:00)、1つのテーマに集中して参加してもらえるようにしました。今回は統計科学において近年重要なテーマとなっている標本調査とベイズ理論についてのチュートリアルセッ

ションを設けることとし、講師の先生方と相談した結果「標本調査法への統一的なアプローチと新展開」と「ベイズ理論の現在」という2つのテーマでチュートリアルセッションを行うこととしました。それぞれのセッションの概要は以下の通りです。

[テーマ1] 標本調査法への統一的なアプローチと新展開

講師：土屋隆裕 (統計数理研究所)・星野崇宏 (名古屋大学)

前半では具体例を通じて、比推定や回帰推定などのよく知られた推定量がキャリブレーション推定という新しい枠組みから統一的に議論できることや、補助変数を用いた事後調整への応用の仕方が丁寧に紹介されました。さらに、その一部についてはRによる解析法の紹介も示されました。

後半では最近の標本調査法における重要なトピックである不在や回答拒否などによる無回答に対する対処法として事後的な調整法について、欠測モデルの枠組みからの議論と具体的な調整法の紹介が行われました。セッションの最後には質問時間が設けられ、キャリブレーション推定における最適化の意味付けや、事後的な調整法にどのような変数を用いるべきかについて、参加者も含めた活発な議論が行われました。

[テーマ2] ベイズ理論の現在

講師：駒木文保 (東京大学)

ベイズ理論に基づく予測分布の構成問題と、その問題に対する情報幾何的な接近の解説、次いでモデル選択におけるベイズ法の問題点についての解説がなされました。関連する研究も含めて、丁寧かつ明快な説明がなされ、有意義なチュートリアルだったと考えます。チュートリアル終了後に熱心に質問をしている複数の若手の参加者の姿が見られ、充実したものであることが伺えました。

一昨年はチュートリアルセッションと市民講演会がパラレルで開催されていましたが、昨年以降、市民講演会の前にチュートリアルセッションを開

催しています。一昨年のように2つのセッションを前後に設けることでどちらにも参加したいという参加者の声に答えるべきかどうかや、テーマをどの分野から選定するべきかなど、来年度のチュートリアルを企画する前にプログラム委員会で議論する必要があると考えられます。

セミナー当日の聴講者は、テーマ1が約100名、テーマ2が約150名でした（途中の入退室や入れ替わりもあるため概数です）。実行委員会には大きめの教室を用意して頂きましたが、両方のセッションとも席がほぼ埋まる盛況で、今年度のチュートリアルセッションは成功裏に終わったといえます。講演を快く引き受けていただいた講師の方々、およびチュートリアルセッションのためにご尽力頂いた実行委員会、運営委員会に感謝申し上げます。

10.3 市民講演会報告

樫 広計（統計数理研究所）

今年の市民講演会は、「統計で経済・社会の深層を探る」をテーマとし2名の講演者を招待し、チュートリアルセッション終了後早稲田大学国際会議場（井深大記念ホール）で行われました。それぞれの講演の概要は以下の通りです。

〔講演1〕2010年参議院選挙と有権者の意識構造
講演者 田中愛治（早稲田大学政治経済学術院）

本講演では、近年の国政選挙における有権者の投票行動についてデータに基づく報告がなされ、各選挙における自民党や民主党の勝因・敗因などが詳細に分析されました。特に近年の無党派層を積極的無党派層、消極的無党派層に大別し、その行動様式などについて報告がなされ、本来各政党はどのような戦略を採るべきであったかということ、どのような責任政党が必要とされているかということが示されました。

〔講演2〕行動ファイナンスと株式市場一身の周りの情報と株価の深いつながり—

講演者 吉野貴晶（大和証券キャピタル・マーケット株式会社 金融証券研究所）

本講演前半は身近な生活情報が景気ないしは株価と関連性があるか否かについて、講演者の仮説を基に検討した様々な分析が紹介されました。後半では、企業の業績の変動が大きい程、アナリストによる業績予想も困難になることを示すとともに、この変動が利益の持続性とも関連し、業績変動が大きく直近の業績の悪い企業には回帰効果が働き、投資のチャンスがあることを示しました。

2つの講演ともに社会の重要な意思決定に、今後統計を積極活用することの必要性を強く感じさせるもので、120名ほどの参加者も熱心に聴き入っていました。講演資料については、順次連合大会のウェブページにアップされる予定です。なお、本講演会は、科学研究費基盤研究（A）「科学的政策決定のための統計数理的基盤整備とその有効性実証」（代表者：北川源四郎）の支援を受けた。大変ご多忙の中本講演を快諾し、興味深い話題を提供して下さいました両講演者と素晴らしい会場を提供して下さい、運営を支援して下さいました早稲田大学関係者の皆様には、心から感謝申し上げます。

10.4 コンペティション講演報告

瀬尾 隆（東京理科大学）

今年で第8回を迎えましたコンペティション講演は、申込み講演数23件と過去最高の講演数であり盛大かつ無事に終了することができました。統計関連学会の発展のためにも若手の方が数多く申込み、講演していただいたことは、非常に喜ばしいことだと思っております。

コンペティション講演の対象者は、2010年4月1日時点で満30歳未満のいわゆる若手研究者（大学院生、教員、社会人等を問わない）です。また今回は、30歳以上でも、大会当日に現役の修士（前期博士課程）大学院生ないしは学部の学生の方も対象者となりました。大会における連名講演の場合は、コンペティション対象者は実際に口頭発表した方となります。

コンペティション講演を申し込まれた方皆さん

に大会当日に講演していただきました。審査方法は、昨年と同様に当日の口頭発表に対して、審査員およびコンペティションセッションの参加者の記名投票に基づき、総合評価で行いました。評価は、研究内容のみならず、発表者各自が工夫をして、うまく内容を伝えられたか、質問に的確に答えられたかという発表の仕方も含め、全体としての素晴らしいプレゼンテーションになっているかを評価の対象とし、A、B、Cの3段階評価（A：受賞に値する、B：受賞としてもよい、C：受賞に値しない）を用いました。なお、講演者ならびに共著者は自身への投票はできないことになりました。

コンペティションセッションは9月6日（月）の午後（2）、9月7日（火）の午前、午後（1）、午後（2）の合計4セッションで行われ、選考はプログラム委員会で行いました。今回は講演数が多かったこともあり、慎重に審議した結果、最優秀報告賞は1名、優秀報告賞は5名に授与することとなり、2010年度統計関連学会連合大会の最優秀報告賞は、廣瀬 慧さんに、優秀報告賞は、生亀 清貴さん、近藤 健司さん、高橋 翔さん、中江 健さん、そして、本橋 永至さんに決定いたしました（五十音順）。大会9月8日（水）の閉会式において、受賞者を発表して表彰し、それぞれ賞状と副賞が統計関連学会連合大会理事長より贈呈されました。

コンペティション講演をされました全員が、研究内容や発表の仕方等、素晴らしいプレゼンテーションでありました。昨年のコンペティション報告にも書きましたが、連合大会のような大変権威ある大きな学会でコンペティション講演することは、受賞する、しないにかかわらず、若手の皆さんにとって大変に有益であり、今後の研究活動への大きな励みになると思います。若手によるコンペティション講演は、毎年、大変多くの方が関心を持って注目しております。多くの方に自分（自分の研究と自分自身）を知ってもらい、またとない絶好のチャンスであります。

権威あるジャーナルへ論文を掲載することは重

要なことではありますが、それとともに、若手の皆さんにとって、多くの方から一躍注目される立派なコンペティション発表をすることも大変に重要なことでもあります。今回コンペティション講演をされました方の中から、将来世界のトップクラスの統計研究者が誕生するものと確信しております。これからも若手の皆さんには、是非コンペティション講演を考えていただきたいと思います。

最後に、コンペティション講演を申し込まれました皆様、そして、コンペティション講演に関する準備等いろいろとご尽力いただきました大会運営関係者の方々へ心よりお礼申し上げます。

コンペティション受賞者のことば

[1] 最優秀報告賞

廣瀬 慧（九州大学）

このたびは、統計関連学会連合大会コンペティション講演において、最優秀報告賞という大変栄誉ある賞を頂き、驚きと共に大変嬉しく思っております。コンペティション講演を企画・運営してくださった先生方、ならびに座長の先生方、そして審査に参加していただきました皆様方に厚く御礼申し上げます。また、常日頃よりご指導いただいております統計数理研究所の樋口知之先生、データ同化グループの皆様、一緒にディスカッションしましたOLM デジタルの安生健一様、そして、学部時代からご指導いただいております九州大学の小西貞則先生に深く感謝いたします。

今回の報告では、フェイシャルモーションキャプチャーデータと呼ばれる、現実の人の顔の動きをデジタル化したデータに基づいて、キャラクターの静止画から動画を作り出し、さらに、その表情付けも行う方法について発表いたしました。この方法は、ゲームやwebコンテンツなど、様々な場面で応用できると考えられます。今後ますます、アニメーション・CGの分野において、統計科学および機械学習の諸手法に基づく方法論が発展すると確信しています。

実は、私は昨年度もコンペティションに出場し

ましたが、賞を取ることはできませんでした。そこで、今年は去年よりもいいプレゼンテーションを行うために、練習量を増やしました。スライドを全く見なくても、何枚目にどのスライドがあるのか完璧に記憶するくらい徹底しました。本番当日は、満員電車の中で、パソコンも開かず原稿も見ずに、ひたすらイメージトレーニングしていました。

今回頂いた賞を励みに、これまで以上に日々の研究に励んでいきたいと思えます。ありがとうございました。

[2] 優秀報告賞

生亀 清貴 (東京理科大学)

この度は統計関連学会連合大会において、大変栄誉ある賞をいただき誠に有り難うございます。このようなコンペティション講演を企画・運営してくださった先生方、講演を聴いてくださった皆様、厚く御礼申し上げます。また、常日頃より御指導くださいました富澤貞男先生に心から感謝を申し上げます。

本報告では順序カテゴリからなる正方分割表に対し、周辺リジットを未知のスコアとして用いた新しいモデルを提案し、そのモデルの有用性を理論と応用の両面から示しました。さらに提案したモデルに関する分解定理を与えました。この分解定理は実データの解析において、より詳細な解析をするのに有用であることを示しました。分割表データ解析は、医学・生物学・社会学・心理学等多くの分野で用いられており、分割表解析の研究は非常に有益であると考えております。

今回のコンペティション講演におきましては、研究内容を15分という限られた時間で聴衆の方々にはわかりやすく伝えるため、発表内容の構成、スライドの作成、表現方法などの工夫を行いました。多くの表や図を用いて視覚的・直感的に理解していただけるよう、最大限の努力を払いました。また時間配分や緊張による失敗をなくすために、何度も練習を行い、本番に臨みました。このような努力を評価していただき、大変嬉しく思います。

最後になりますが、この受賞を励みにしてより一層の努力を重ね、微力ながらも統計学の発展に尽力していく所存であります。このからもどうぞよろしく願い申し上げます。

[3] 優秀報告賞

近藤 健司 (日本興亜損害保険株式会社)

このたびは、優秀報告賞をいただき、大変光栄に存じます。コンペティションの企画・運営に関わられた方々、そして私の発表に耳を傾けて下さった皆様に厚くお礼申し上げます。また、東京大学大学院時代の恩師である駒本文保先生をはじめとして、平素よりご指導下さる方々にもこの場を借りて改めて感謝申し上げます。

本報告では「ベイズ経験尤度法における優調和事前分布の利用とその有限標本理論」と題して、事後分布を比較するための新たな基準の提案と、その応用としてセミパラメトリックモデルに対するベイズ法の拡張である、ベイズ経験尤度法における事前分布の選択について発表いたしました。得られた結果を平たく言えば、『事後分布を将来の予測に重度に利用するならば、ベイズ経験尤度法における事前分布として優調和事前分布を用いるのが良い』ということになります。そもそもベイズ法においては予測の立場から考えることで、自然な損失の下で最適性を議論することが可能となります。また様々なパラメトリックモデルにおいて、優調和事前分布がJeffreys事前分布など従来の無情報事前分布よりも優れたベイズ予測法を与えることが分かっています。このような優調和事前分布の優位性を、セミパラメトリックモデルにおいても利用可能と示すことが本研究の大きなねらいでした。技術上の問題から、上記における予測問題そのものではなく、理想的な状況での予測問題の極限を考えることで、関心ある母数の事後分布自体を直接比較する新たな比較基準を導き、セミパラメトリックな高次元の位置モデルに対するベイズ経験尤度法に関して優調和事前分布の優位性を示しました。

最後に、就職して研究に割く時間が少なくなる

中で細々と計画した発表がこのような評価をいただいたことに、大変励まされています。今回の受賞を発奮の材料として今後の研究を進めてまいりますので、より一層のご指導をよろしくお願いいたします。

[4] 優秀報告賞

高橋 翔 (東京理科大学)

このたび、統計関連学会連合大会コンペティション講演において優秀報告賞を頂き大変光栄に思っています。日々ご指導頂いております瀬尾隆先生をはじめ、共同研究を快く承諾してくださった東海大学の今田恒久先生およびお世話になっているすべての方々に心から感謝を申し上げます。

今回の発表では、正規確率ベクトルの成分間の独立性を検定する問題について議論を行いました。特に、ある1つの成分を対照とし、その他の成分との間に相関があるかを調べる同時検定を考え、ステップダウン式多重比較法による同時検定手法を提案しました。多変量解析では、確率ベクトルの成分間が独立であると仮定されることがありますが、実際に得られた生のデータは独立であるとは限らないため、独立性を議論することは非常に重要となります。そのためこのような独立性の検定の研究は今後も役立つと考えられます。

今回のコンペティション講演では、わかりやすい発表をするために、スライドの作成や表現方法を工夫し、何度も発表練習を重ねました。これらの努力を評価していただいたことは非常に嬉しく思っております。また、これらの経験は非常に貴重なものであり、これからの研究への自信となりました。

最後になりますが、コンペティション講演を企画・運営していただいた関係者の方々、審査に参加いただいた方々に改めて心から感謝申し上げます。この受賞を励みとして、一層の努力を重ね、統計学の発展に少しでも貢献できればと思いますので、今後もよろしくようお願い申し上げます。

[5] 優秀報告賞

中江 健 (総合研究大学院大学)

この度は統計関連学会連合大会コンペティション講演において優秀報告賞を頂き、光栄に思います。まず初めに、私の研究人生に大きな影響を与えた指導教官の伊庭幸人先生に感謝を捧げます。また、私の発表技術を磨いていただいた青柳富誌生先生とその研究室のメンバー、この研究を始める切掛けとなった、インドでの研究会に同行した統計数理研究所のメンバーにも深く感謝しております。当然のことではありますが、このコンペティションを企画、運営された皆様と審査された皆様に厚く御礼を申し上げます。

本研究では位相応答曲線と呼ばれる、自然界に存在する様々な同期現象を有効に記述する関数を効率的に推定する手法を提案しました。私の先行研究では、この位相応答曲線の測定データに内在する強い相関を表現するモデルを導出し、このモデルに対してレプリカ交換モンテカルロ法を用いて推定を行いました。しかし、サンプルサイズが100程度でも推定に3日程度かかり、とても実用に向かないという本質的な問題がありました。

本研究では、この統計モデルに特化したデータ変換を利用することで、この推定を1分程度に縮めることができ、実用に対しても大きな一歩を踏み出したと考えています。

このコンペティション講演では、研究のコアとなるデータ変換に基づいた推定を、できるだけ簡素かつ直感的に説明するように腐心いたしました。このことが今回の賞を得ることとなった一因と考えております。ただ、あまりに簡単に説明しすぎたためか、残念ながら質疑応答で活発な議論を行うことができませんでした。この反省点を基に、次回にこの学会で発表する機会をいただければ、わかり易く説明するだけでなく聴衆が魅了を感じるような発表を行いたいと思います。これを読んでおられる方が、もし私の発表を聞く機会があれば、研究の根幹を疑うような厳しい質問や、初等的な質問などでも歓迎しますので、質問をいただけると非常に嬉しいです。

[6] 優秀報告賞

本橋 永至 (総合研究大学院大学)

この度は統計関連学会連合大会コンペティション講演において優秀報告賞を賜り、大変光栄に思っております。日頃からの確なご指導を下さっております指導教授の樋口知之先生、プログラミングについて基礎からご指導頂きました統計数理研究所の長尾大道先生、発表練習の際に貴重なご助言を下さいました同研究所のデータ同化グループのメンバーの皆様、私の研究生生活を陰で支えて下さっております樋口研究室の秘書の皆様にも深く感謝申し上げます。

本報告では、市場の動的変化を考慮した消費者のブランド選択行動モデリングを提案しました。プロモーションの長期的効果などを捉えるための市場の動的変化に関する研究は、売上などの集計データに基づいて過去に数多く行われてきましたが、個々の消費者のブランド選択といった非集計データに基づく研究はこれまで行われておりませんでした。提案モデルは、状態空間モデルを用いて消費者のブランド選択行動を表現することによ

り、非集計レベルでのプロモーションの長期的効果を抽出することを可能にしました。また、状態変数の推定には、状態空間モデルに正規性や線形性などの仮定を必要としない粒子フィルタを使用しました。状態空間モデルや粒子フィルタのマーケティングへの適用に関する研究は始まったばかりであり、今後それらの有効性がますます注目されることが予想されます。

近年、マーケティングの分野では消費者の嗜好の多様化や情報技術の進歩などの理由から、データから抽出された情報に基づく意思決定の重要性が高まっております。また、データの規模も年々大きくなってきており、それをビジネスに有効に活用するための分析手法の開発が学術界に期待されています。今回の受賞を励みに、今後もマーケティングにおける統計手法の開発と統計科学への発展に寄与できますよう日々研鑽を重ねていく所存でありますので、今後ともご指導ご鞭撻の程、何卒宜しくお願い申し上げます。最後になりましたが、本コンペティションの企画、運営、審査に携われた方々に厚く御礼申し上げます。

11. 会長候補者推薦のお願い

美添 泰人 (日本統計学会会長)

本年秋には次期会長(2011・2012年)の選挙が行われます。本学会では、会長候補者を会員から推薦していただくことになっております。この趣旨は、一般の会員の参加意識を高めることにあります。多くの会員の皆様から推薦をいただけることが前提ですので、積極的にご推薦くださるよう、宜しくお願いいたします。

1. 推薦者は正会員または名誉会員とし、同一の候補者を複数の会員が連名で推薦することも可能です。
2. 会長候補者を推薦するには、推薦者の署名捺印、推薦理由書、候補者の履歴書、業績リスト

などを事務局へ提出して頂く必要があります。詳細は事務局までお問合せください。

3. 今回の会長選挙のためには、2010年11月15日までに、所定の書類を事務局に提出することが必要です。

問合せ先：日本統計学会事務局

〒101-0051 千代田区神田神保町3-6

能楽書林ビル5F

(財)統計情報研究開発センター内

Tel & Fax : 03-3234-7738

e-mail : shom@jss.gr.jp

12. 和文誌特集号のお知らせ

特集「MCMCの経済・経営データへの応用」編集担当
大森 裕浩（東京大学）・渡部 敏明（一橋大学）

日本統計学会和文誌では、2011年9月号で「MCMCの経済・経営データへの応用」と題する特集を予定しています。

つきましては、投稿を希望される方は2011年3月末までに、2011年9月号の

特集「MCMCの経済・経営データへの応用」への投稿であることを明記の上、日本統計学会誌投稿規定

<http://www.jss.gr.jp/ja/journal/rule.html>

に従い、論文をご送付下さい。

13. 統計資料館・統計図書館の紹介

飯島 信也（総務省統計研修所）

2010年度統計関連学会連合大会においては、総務省統計局等がサイドイベントとして企画した統計局・統計センター見学ツアーに、多数の皆様にご参加いただき、誠に有難うございました。今回のツアーでご好評をいただいた統計資料館は、常時一般公開しておりますので、今後もぜひご利用ください。

総務省統計研修所では、統計資料館のほか統計図書館も運営しています。この機会をお借りして、改めて両館の紹介をさせていただきます。

統計資料館のご案内

統計資料館は、公的統計の発展過程に関する資料を収集・展示する施設として、平成3年、統計局創設120年を記念して総務省統計局敷地内に開設されました。館内には、明治初期からの統計に関する貴重な文献、初の国産の統計集計機「川口式電気集計機」（明治38年）をはじめとする集計機器、大正9年の第1回国勢調査から今日に至るまでの統計調査に関する各種記録・用品などを展示しています。

どなたでも自由に観覧いただけますので、お気軽にお立ち寄りください。特に、生徒・学生の方々には、統計に親しみながら学んでいただくための見学先としても好適ですので、ぜひご利用

ください。

個人で見学される場合、事前予約なしでご覧いただけますが、団体でお越しになる場合には、事前に団体受付までご連絡ください。

統計図書館のご案内

また、統計局の建物の1階には、統計図書館があります。統計図書館は、内外の統計関係資料を所蔵する統計の専門図書館で、蔵書は約27万冊（和書18万冊、洋書9万冊）です。統計局HPから蔵書の検索もできます。図書館にお越しいただければ、どなたでも閲覧いただけますので、ご利用ください。なお、一般への貸出はしていませんが、学術又は調査研究の目的であれば図書・資料の複写（有料）は可能です。

統計研修所について

統計研修所は、統計局等とともに中央統計機関の一翼を担い、統計知識の普及・発達のため次のような業務を行っています。

- (1) 各府省・地方自治体の職員への統計研修
 - (2) 統計に関する学術研究活動（統計研究彙報の刊行、外部研究者との共同研究など）
 - (3) 日本統計年鑑等の総合統計書の編集刊行
 - (4) 統計図書館・統計資料館の運営管理
- 学会の皆様にも、統計研修の講師や、研究活動

での共同研究など、様々な形でご支援をいただいています。今後ともよろしく願いいたします。

統計資料館・統計図書館についての情報

(1) 所在地

〒162-8668 東京都新宿区若松町19-1
(総務省統計局敷地内)

(2) 開館時間

午前9時30分から午後5時まで
(土日、祝日、年末年始は休館)

(3) 連絡先

統計資料館 03-5273-1187
同 団体受付 03-5273-1131
(統計図書館運営企画係)
統計図書館閲覧室 03-5273-1132
統計相談室 03-5273-1133

(4) その他、詳しい情報はインターネットをご覧ください。統計局 HP (www.stat.go.jp) のトップページ最下部に、統計図書館と統計資料館の入口があります。

14. 第5回日本統計学会春季集会について

岩崎 学 (日本統計学会理事長)

縄田 和満・佐藤 美佳 (春季集会担当理事)

日本統計学会春季集会が下記の日時および会場にて開催の予定です。春季集会では、統計教育に関するセッションや2010年度の統計学会の各賞受賞者による講演が計画されています。また、特に若い人を対象としたポスターセッションも実施予定です。遠方の若手の方には旅費の援助も検討しています。詳細は次号会報にてご案内いたしますが、

早目のご準備をお願いいたします。

日 時：2011年3月13日(日) 10:00~17:30

セッション終了後に懇親会

会 場：立教大学(東京池袋)

参加費：無料(ただし懇親会は有料)

15. 2011年度統計関連学会連合大会について

2011年度統計関連学会連合大会は九州大学において、2011年9月4日(日)から7日(水)の間、

開催されることが決まっております。詳細については、次号に関連記事を記載する予定です。

16. 第78回日本統計学会総会報告

日 時：2010年9月7日(火) 11:45~13:30

場 所：早稲田大学 7号館 418講義室

山下智志庶務担当理事の司会進行により開会された。

1. 会長挨拶：

美添泰人会長より挨拶がなされた。

2. 議長選出：

議長として竹村彰通会員が選出された。

3. 2009年度事業報告・同決算報告、および会計監査報告：

山下智志庶務担当理事より、資料(付表)に基づいて、若干の文言修正をともなう事業報告案および決算報告案の説明があり、引き続き小暮厚之監事より会計報告がなされ、質疑応答の上、承認

2009年度事業報告

(2009. 4. 1～2010. 3. 31)

- 日本統計学会第77回大会の開催
2009年9月6日～9日の4日間におわり、同志社大学京田辺キャンパス、今出川キャンパスにおいて開催した。今回は統計関連学会連合大会の一環として開催した。
- 第77回大会講演報告集を発行した。
連合大会の講演報告集に含まれる。
- 会誌の発行
欧文誌2号[Vol.39 No.1 (6月), No.2(12月)], 和文誌2号[第39巻シリーズJ第1号(9月), 第2号(3月)]について編集・発行を行った。
- 会報の発行
No.139(4月), No.140(7月), No.141(10月), No.142(1月)を発行した。
- 賞の授与
第14回日本統計学会賞, 第5回日本統計学会統計活動賞, 第5回日本統計学会統計教育賞, 第3回日本統計学会研究業績賞, 第2回日本統計学会出版賞, 第23回日本統計学会小川研究奨励賞を授与した。
- 研究部会の活動
2009年12月に活動を開始する部会を募集した。
- 春季集会の開催
2010年3月7日に青山学院大学において春季集会を開催した。
- 研究分科会の活動
以下の2つの分科会を継続した。
「統計教育部会」(藤井良直主査:2006年12月発足, 2010年11月終了予定)
「計量経済・計量ファイナンス分科会」(谷崎久志主査:2006年12月発足, 2010年11月終了予定)
以下の2つの分科会が期中に発足した。
「スポーツ統計分科会」(田村義保主査:2009年6月発足, 2013年5月終了予定)
「金融の計量リスク管理分科会」(三浦良遊主査:2009年9月発足, 2013年8月終了予定)
- 各種委員会の活動
評議員会, 理事会, その他の各種委員会を開催した。
- その他

- 各種の国際交流事業を行った。
- インターネット経由での情報発信を促進する。英文のホームページを充実させた。
- 統計関連学会連合の事業推進に協力した。
- 入会者拡大の方策を検討した。
- 会員名簿を作成した。

2009年度決算

(2010年3月31日現在)
(単位:円)

借方		貸方	
科目	期末	科目	期末
固定資産	180,471	0 1) 未払い金	1,731,330
流動資産	13,179,959	23,024,816	1,100,000
現金	98,757	29,032	200,000
振替口座	341,489	役員旅費補助積立金	600,000
預貯金	12,739,713	名簿作成積立金	0
		60周年記念基金	7,735,648
		75周年記念基金	0
		学委自己資金	180,471
		学委活動積立金	3,500,000
		繰越金	6,048,629
計	13,360,430	23,024,816	13,360,430
		計	23,024,816

(ii) 収入

科目	細目	予算額(単位円)	決算額(単位円)
今期繰入金		6,048,000	6,048,629
未払い金繰り入れ		1,731,000	1,731,330
学委自己資金取崩		180,000	180,471
学会活動積立金取崩		0	0
OA機器積立金取崩		1,100,000	1,100,000
役員旅費補助取崩		200,000	200,000
名簿作成積立金取崩		600,000	600,000
会費収入		11,000,000	11,240,000
	名誉会員・正会員	10,000,000	10,000,000
	学生会員	200,000	205,000
	遊及請求分	800,000	1,029,000
補助法人費		1,480,000	1,070,000
団体会員費		160,000	200,000
科学研究費補助金		800,000	800,000
「研究成果公開促進費学術定期刊行物」			
雑収入		1,840,000	1,756,442
	会誌購読料	810,000	701,000
	利子収入	30,000	12,871
	広告収入	1,000,000	945,000
	その他	0	97,571
60周年記念事業基金組入		0	7,735,648
75周年記念事業基金組入		0	1,000,000
75周年記念事業基金組入		0	428,000
計		25,139,000	34,090,520

- 旧学会事務室にあった事務機器を除去した
- 今年度から前年度の和文誌の第2号の印刷費と郵送費を未払い金しなかったこととした。
- OA機器の購入予定がなかったため、積立金を取り崩した
- 役員旅費の執行予定がなかったため、積立金を取り崩した
- 60周年記念事業基金を学会会計に組入
- 75周年記念事業基金を学会会計に組入
- 名簿を作成したため名簿作成積み立て金を全額取り崩した

(iii) 支出

科目	細目	予算額 (単位円)	決算額 (単位円)
印刷費	会誌 (J38-2)	13,130,000	8,400,029
	会誌 (39-1~2, J39-1)	1,570,000	1,570,460
	未払い金 (J39-2)	9,500,000	5,060,927
	会報 (139号~142号)	0	0
	名簿印刷費	800,000	746,025
	その他	600,000	679,400
	大会開催費	660,000	343,217
	春季集会開催費	240,000	746,298
	懇親会	200,000	628,298
	懇親会	40,000	118,000
出版賞費	0	22,540	
研究部会費	300,000	0	
研究分科会	100,000	80,000	
学会運営会合費	410,000	118,236	
常務費	評議員会	110,000	43,435
	特別委員会	40,000	0
	統計教育委員会	20,000	0
	会誌編集委員会	40,000	0
	理事会	200,000	74,801
	その他	0	0
	事務費	1,230,000	318,769
	一般事務人件費	650,000	10,400
	校正編集事務人件費	120,000	171,000
	発送事務人件費	250,000	84,000
事務用品	100,000	41,359	
事務室借料	100,000	0	
その他	10,000	12,010	
費	学会事務業務委託費	2,340,000	2,340,000
	通信・郵送料	2,921,000	1,573,016
	会誌 (J38-2)	161,000	160,870
	会誌 (39-1~2, J39-1)	840,000	482,500
	未払い金 (J39-2)	0	0
	会報 (139号~142号)	720,000	404,790
	名簿送料	650,000	128,820
	その他通信・郵送料	550,000	396,036
	役員旅費補助	100,000	216,620
	各種分担金	192,000	125,000
ネットワーグ維持費	日本経済学会連合	35,000	35,000
	ISI	67,000	0
	構断型連合	50,000	50,000
	統計関連学会連合分担金	40,000	40,000
	国際交流促進費	15,000	4,725
	予備費	100,000	350,000
	名簿作成積立金	300,000	300,000
	60周年記念基金組入	0	7,735,648
	75周年記念基金組入	0	1,000,000
	固定資産除去費	0	180,471
次期繰越金	3,761,000	10,489,168	
計	25,139,000	34,090,520	

会計監査報告書

2010年8月9日

日本統計学会会則第22条に基づき、2009年4月1日より2010年3月31日までの会計整理を監査した結果、決算書の通り相違ないことを認めます。

監事

高橋 一
小暮 厚之

2010年度事業計画

(2010.4.1～2011.3.31)

1. 日本統計学会第78回大会の開催
2010年9月5日～8日の4日間におたり、早稲田大学早稲田キャンパスにおいて開催する。今回も統計関連学会連合大会の一環として開催する。
2. 第78回大会講演報告集の発行
連合大会の講演報告集に含まれる。
3. 会誌の発行
欧文誌2号[Vol.40 No.1 (6月), No.2(12月)], 和文誌2号[第40巻シリーズJ第1号(9月), 第2号(3月)]を編集・発行する。
4. 会報の発行
No.143 (4月), No.144 (7月), No.145 (10月), No.146 (1月) を発行する。
5. 賞の授与
第15回日本統計学会賞, 第6回日本統計学会統計活動賞, 第6回日本統計学会統計教育賞, 第4回日本統計学会研究業績賞, 第3回日本統計学会出版賞, 第24回日本統計学会小川研究奨励賞を授与する。
6. 研究部会の活動
2010年12月に活動を開始する部会を募集する。
7. 春季集会の開催
8. 研究分科会の活動
「統計教育部会」(藤井良直主産:2006年12月発足,2010年11月終了予定)
「計量経済・計量ファイナンス分科会」(谷崎久志主産:2006年12月発足,2010年11月終了予定)
「スポーツ統計分科会」(田村義保主産:2009年6月発足,2013年5月終了予定)
「金融の計量リスク管理分科会」(三浦良造主産:2009年9月発足,2013年8月終了予定)
新規に活動を開始する分科会を随時募集する。
9. 各種委員会の活動
評議員会, 理事会, その他の各種委員会を開催する。
10. その他
 - (i) 国際交流を推進する。
 - (ii) インターネット経由での情報発信を促進する。英文のホームページを充実させる。
 - (iii) 統計関連学会連合の事業推進に協力する。
 - (iv) 入会者拡大の方策を検討・実施する。
 - (v) 会誌購読拡大の方針を検討・実施する。
 - (vi) 評議員選挙, 会長選挙を実施する。



2010年度予算

(i) 貸借対照表

借方	期首		貸方	期末	目	科	目	期首	期末
	目	金額							
流動資産		23,024,816		300,000	名簿作成積立金			300,000	
現金		29,032		7,735,648	60周年記念基金			7,735,648	
振替口座		525,369		1,000,000	75周年記念基金			1,000,000	
預貯金		22,470,415		3,500,000	学舎活動積立金			3,500,000	
計		23,024,816		10,489,168	繰越金			10,489,168	
				23,024,816	計			23,024,816	

(2010年4月1日現在)
(単位 円)

(ii) 収入

科	目	細		目	金額
		目	金額		
今期繰入金			10,489		10,489
名簿作成積立金取崩			0		0
会費収入		11,000		名譽会員・正会員 学生会員 謝及請求分	10,000 200 800
賛助法人費		1,000			1,000
団体会員費		200			200
科学研究費補助金 〔研究成果公開促進費学術定期刊 行物〕		800			800
雑収入		1,720		会誌購読料 利子収入 広告収入	700 20 1,000
計			25,209		25,209

(2010年度予算注)

1) 本年度は名簿の発行をしない。

(iii) 支出

科	目	金額	細	目	金額
印刷費		8,300	会誌 (40巻 1,239-J2,40-J1号) 名簿印刷費 その他		7,000 800 0 500
大会開催費		750	春季集会開催費 各賞運営経費		650 100
研究部会費		300			300
研究分科会費		100			100
学舎運営会合費		260	評議員会 特別委員会 統計教育委員会 会誌編集委員会 理事会		100 20 20 20 100
事務費		460	一般事務人件費 校正編集事務人件費 発送事務人件費 事務用品 事務室借料 その他		50 200 100 50 50 10
学舎事務業務委託費		2,340			2,340
通信・郵送費		1,690	会誌送料 会報送料 名簿送料 その他通信・郵送料		840 450 0 400
役員旅費補助		200			200
各種分担金		150	日本経済学会連合 I S I 横断型連合 統計関連学会連合		35 25 50 40
ネットワーク維持費		10			10
国際交流促進費		350			350
学舎資料整理保存費用		300			300
予備費		100			100
名簿作成積立金		300			300
次期繰越金		9,599			9,599
計		25,209			25,209

(2010年度予算注 続き)

2) 会誌と会報などの発送用封筒や入会のお誘いの印刷など。

3) 学舎五賞 (統計学賞, 研究業績賞, 統計活動賞, 統計教育賞, 出版賞), 小川賞の懇話会招待分。

4) 事務員の交通費。

5) トメイン使用料, 学舎サーバー委託費。

註: 75周年記念基金より出版費を支出

6) 60周年記念基金より業績, 学舎, 活動, 教育費費用, および学舎資料の整理保存費用を支出

された。

4. 評議会からの報告：

美添泰人会長より、2008・2009年度第5回評議員会（9月5日開催）、2010・2011年度第1回評議員会（9月6日開催）での議事に関して報告された。理事長については、岩崎学前理事長が再任されたことが報告され、岩崎学理事長より就任の挨拶があった。

5. 2010年度事業計画・同予算：

中西寛子庶務担当理事より、資料（付表）に基づいて、若干の文言修正をとまなう事業計画案・同予算案の説明がなされ、質疑応答の上、承認された。

6. 第78回大会について：

美添泰人会長より、2011年度第79回大会を九州大学において、2011年9月4日から7日の間で、

統計関連学会連合大会として例年通り4日間の会期で開催する予定であることが報告された。

7. 日本統計学会の法人化について：

美添泰人会長より、資料に基づいて日本統計学会の法人化について説明され、質疑応答の上、承認された。

8. その他：

美添泰人会長より、資料に基づいて資格認定制度について説明され、質疑応答の上、承認された。

議題6の終了後、第15回日本統計学会賞、第6回日本統計学会統計活動賞、第6回日本統計学会統計教育賞、第4回日本統計学会研究業績賞、第3回日本統計学会出版賞、第24回日本統計学会小川研究奨励賞の授賞式が行われ、引き続き、議題7へと戻った。

17. 評議員会議事録

2008・2009年度 第5回評議員会議事録

日時：9月5日（日）18：00～21：15

場所：早稲田大学 早稲田キャンパス 3号館
2F 第1会議室

出席者：美添泰人会長、岩崎学理事長、評議員：伊藤彰彦、稲葉弘道、狩野裕、川崎茂、栗木哲、桑原廣美、西郷浩、佐藤学、杉山高一、瀬尾隆、竹村彰通、田村義保、椿広計、富澤貞男、中野純司、藤井良宜、藤越康祝、舟岡史雄、水田正弘、矢島美寛、山下智志、山本拓、若木宏文、渡辺美智子（以上26名、委任状13通）、（オブザーバ：中西寛子、各務和彦）

冒頭、美添会長より評議員会の成立が宣言された。

報告事項：

<議題1>理事会からの報告

岩崎理事長より、春季集会が立教大学で開催されること、IMS-APRM2011が7月に大宮で開催されること、が報告された。

<議題2>学会賞各賞および小川研究奨励賞受賞者について

美添会長より、資料に基づき、学会賞各賞および小川研究奨励賞受賞者が報告された。

<議題3>各委員会からの報告

[学会活動特別委員会]

田村委員長より、統計学の質保証・資格認定について議論してきたことが報告された。

[学会組織特別委員会]

矢島委員長より、統計学会の法人化について議論してきたこと、シニア会員の会費減免について周知されたことが報告された。

[統計教育委員会]

渡辺委員長より、資料に基づき統計学分野の教育課程編成について議論してきたことが報告された。

<議題4>第78回大会について

美添会長より、第78回大会が無事に始まったことが報告された。

<議題5>入・退会者について

山下理事より、回覧資料に基づき、入退会者が紹介された。

<議題6>その他

美添会長より、2011年度第79回大会を九州大学において、2011年9月4日から7日の間で、統計関連学会連合大会として例年通り4日間の会期で開催する予定であることが報告された。

審議事項：

<議題7>2009年度事業報告案、同決算案および会計監査について

山下理事より、資料に基づき、2009年度事業報告案、同決算案について提案され、審議の結果、2案とも承認された。

<議題8>2010年度事業計画案、同予算案について

中西理事より、資料に基づき、2010年度事業計画案、同予算案について提案され、審議の結果、2案とも承認された。

<議題9>総会の式次第について

美添会長より、資料に基づき、総会の式次第が提案され、審議の結果、承認された。

<議題10>学会の法人化について

美添会長より、資料に基づき、学会の法人化について提案され、審議の結果、詳細については定款作成検討ワーキンググループに一任することを含め、学会の法人化を進めることが承認された。

<議題11>統計学の質保証・資格認定について

美添会長より、資料に基づき、統計学の質保証・資格認定について提案され、審議の結果、統計学の質保証・資格認定を行うことが承認された。

<議題12>会費滞納会員について

山下理事より、回覧資料に基づき、会費滞納会員が紹介され、退会と見なすことが提案され、審議の結果、再度連絡した上で会費が納入されなかったものを退会と見なすことが承認された。

<議題13>その他

特になし。

2010・2011年度 第1回評議員会議事録

日時：9月6日（月）18：00～20：00

場所：早稲田大学 早稲田キャンパス 3号館
2F 第1会議室

出席者：美添泰人会長、評議員：赤平昌文、浅井学、岩崎学、大林千一、大森裕浩、大屋幸輔、狩野裕、鎌倉稔成、川崎茂、国友直人、栗木哲、栗原考次、駒木文保、西郷浩、佐藤朋彦、佐藤学、清水邦夫、瀬尾隆、竹内光悦、竹田裕一、田村義保、塚田真一、椿広計、富澤貞男、馬場善久、樋口知之、藤井良宜、藤越康祝、舟岡史雄、前田忠彦、槇田直木、美添泰人、吉田朋広、若木宏文、渡部敏明、渡辺美智子（以上36名、委任状4通）、（オブザーバ：中西寛子、山下智志、各務和彦）

冒頭、会長より評議員会の成立が宣言された。

報告事項：

<議題1>前評議員会からの引き継ぎ事項

美添会長より、前日（9月5日）に開催された2008・2009年度第5回評議員会での議題に関して一通り説明があった後、今期への申し送り事項として、1）春季集会在立教大学において開催されること、2）IMS-APRM2011が2011年7月に大宮で開催されること、3）横幹連合の「学会連携による課題解決型研究活動」への参加について、の説明があった。

<議題2>その他

中西理事より、監事、選挙管理委員の選任を理事長に一任し、次回の評議員会で承認することが報告された。

審議事項

<議題3>理事長の選出

美添会長により、理事会選挙の事務担当として中西理事が指名され承認された。ついで、中西、山下、各務の3氏を選挙管理委員に選出した。選挙方法の説明後、出席評議員の互選による選挙を行い、2回目の投票で過半数の得票があった岩崎

学評議員を新理事長に選出した。岩崎評議員より受諾の意思表示および挨拶があった。

＜議題4＞学会活動特別委員会、学会組織特別委員会の立ち上げ

美添会長より、資料に基づき、学会活動特別委員会、学会組織特別委員会の委員について確認があり、両委員会の発足を承認した。

＜議題5＞学会活動特別委員会、学会組織特別委員会主査の選出

美添会長より、両委員の主査の選出について、各委員会メンバーの互選で最多得票者を主査とする旨の提案があり了承された。投票の結果、学会活動特別委員会では鎌倉稔成評議員が、学会組織特別委員会では狩野裕評議員が主査に選出された。

＜議題6＞統計教育委員会の立ち上げ

美添会長より、資料に基づき、委員について確

認があり、統計教育委員会の発足を承認した。

＜議題7＞統計教育委員会委員長の選出

委員会のメンバーの話し合いの結果、藤井良宜評議員が委員長に選出された。

＜議題8＞学会の法人化について

美添会長より、資料に基づき、学会の法人化について提案され、審議の結果、詳細については定款作成検討ワーキンググループに一任することを含め、学会の法人化を進めることが承認された。

＜議題9＞統計学の質保証・資格認定について

美添会長より、資料に基づき、統計学の質保証・資格認定について提案され、審議の結果、統計学の質保証・資格認定を行うことが承認された。

＜議題10＞その他

次回（第2回）評議員会は、11月20日に開催することが了承された。

18. 理事会議事録

2008・2009年度 第8回理事会議事録

日時：7月17日（土）12：00～15：00

場所：統計数理研究所 八重洲サテライトオフィス会議室

出席者：美添泰人会長、岩崎学理事長、谷口正信（会誌編集・欧文）、根本二郎（広報・ウェブ）、田村義保（渉外・プロジェクト研究）、稲葉由之（大会・プログラム）、星野伸明（大会・プログラム）、古澄英男（大会・運営）、山下智志（庶務会計）、中西寛子（庶務会計）（以上10名、カッコ内は役割分担）

報告事項：

＜議題1＞会長からの報告

美添会長より、前回の理事会で承認を受けた「統計資格に関する検討」について報告があった。具体的には、準備委員会を正式に発足し、実施準備本部の設置、共催に関する組織、試験実施時期について検討していることが示された。

＜議題2＞理事長からの報告

岩崎理事長より、来年度の理事の交代についてお願いがあった。

＜議題3＞各理事からの報告

[欧文誌]

谷口担当理事より、2010年度小川賞の結果について報告があった。

[広報（会報）]

根本担当理事より、会報No.145について担当者を決めてもらいたいとの依頼があり、これを決定した。

[広報（ウェブ）]

根本担当理事より、英文のホームページについて整理したとの説明があった。

[渉外（プロジェクト）]

田村担当理事より、科学研究費の統計科学の分野に関する採択について情報が示された。また、来年度の科学研究費に申請することを学会員に呼びかけることとした。

[大会・プログラム]

星野担当理事より、2010年度統計関連学会連合

大会プログラムについて説明があった。大会中の総会の時間についても決定した。

〔大会・運営〕

古澄担当理事より2010年度統計関連学会連合大会に関する広告について説明があった。また、美添会長より、学会連合運営委員会が連合大会の興行中止保険に加入することを決定し、組織委員長として了解したとの説明があった。

〔庶務会計〕

山下担当理事より、賛助会員の会費と大会の招待について説明があり、今後、賛助会員の処遇について議論する必要があることが示された。この件は次期理事会への申し送り事項とする。

＜議題4＞評議員選挙報告

中西理事より、新評議員が決まったことの報告があった。

＜議題5＞その他

山下理事より、総会での配布資料は8月の上旬までに用意してほしいとのお願いがあった。

審議事項：

＜議題1＞09年度事業報告と決算案について

山下理事より、資料に基づき2009年度事業報告

案・決算案が提示・説明され、了承された。評議員会および総会に諮ることとした。

＜議題2＞10年度事業計画と予算案について

中西理事より、資料に基づき2010年度事業計画案・予算案が提示・説明され、了承された。評議員会および総会に諮ることとした。

＜議題3＞日本統計学会の法人化について

美添会長より、学会組織特別委員会において矢島委員長が提案した法人化の方向が承認されたことが報告された。これを受けて「法人化定款案作成検討WG（仮称）」の発足と今後の検討日程について承認し、さらに会員向けに周知させるための文面について内容を確認した。なお、会員には総会資料として、事前に本件に関する説明資料を送ることとした。

＜議題4＞JJSSにおけるpdfファイルの送付について提案

中西理事より、現在の印刷業者より提案があった内容について説明があり、この提案については断ることにした。今後のアーカイブのあり方について検討することとした。

＜議題5＞入退会者承認

山下理事より、資料が示され承認された。

19. 研究部会新設公募（再掲）

統計学の研究活動を助成するため、日本統計学会が1954年に研究部会制度を設けて以来、これまでに多くの研究部会が誕生し、統計の発展に寄与して参りました。この制度は、公募制をとり、原則として年1ないし2件が評議員会の承認を得て発足します。部会の設置期間は原則、2年以内とします。補助金は1部につき年間10万円で、部会設置後1年を経過したとき、過去1年間の部会の経過報告書及び会計報告書を、また設置期間が終了したとき、経過ならびに成果に関する報告書及び会計報告書を評議員会に提出しなければなりません。また、部会の設置期間終了のとき、寄与した成果について、本学会会報等に報告を掲載して

広く会員に公表するものとするになっていきます。

以下の要領で研究部会を公募いたしますので、ふるってご応募ください。

締切日 2010年11月15日

応募先

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-6
能楽書林ビル5F

（助統計情報研究開発センター内）

日本統計学会事務局

Tel & Fax : 03-3234-7738

E-mail : shom@jss.gr.jp

応募書類の書式は学会ホームページよりダウンロードください。採否は11月に開催予定の評議員会にて審議の上、決定します。

なお、研究分科会（設置期間4年間）について

は随時募集しております。こちらにも積極的にご応募ください。研究分科会の趣旨等については会員名簿の記載または学会ホームページをご参照ください。

20. 新刊紹介

本会会員からの投稿による新刊図書の紹介記事を掲載します。

- Irving Fisher Committee 編 “The IFC’s contribution to the 57th ISI Session, Durban, August 2009,” IFC Bulletin No.33, BIS, August 2010.（収録論文は

<http://www.bis.org/ifc/publ/ifcb33.htm> から無料ダウンロード可)

世界的な金融危機を受け国際的な金融統計整備に関する討議の嚆矢となった、ISI 第58回大会における世界各国の中央銀行統計家による報告論文集。

21. 学会事務局から

学会費払込のお願い

2010年度会費の請求書が会員のお手元に届いていることと思います。会費の納入率が下がると学会会計に大きく影響いたします。速やかな納入にご協力をお願い申し上げます。また便利な会費自動払込制度もご用意しています。次の要領を参照の上、こちらもご活用下さい。

学会費自動払込の問合せ先

学会費自動払込問合せの旨とともに、氏名と住所を以下にお伝えください。手続きに必要な書類が送付されます。

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-6
能楽書林ビル5F
財団法人 統計情報研究開発センター内
日本統計学会担当
Tel & Fax : 03-3234-7738
E-mail : shom@jss.gr.jp

入会承認

石綿元, 宇佐美慧, 鎌谷研吾, 小林裕子, 近藤健司, 坂部裕美子, 嶋田香, 末石直也, 關雅夫, 染谷博司, 竹田恒, 塚原一郎, 長尾大道, 中川雅貴, 平野敏弘, 藤田静, 三崎広海, 米島慎二, 渡邊綾, Mohammad Manir Hossain Mollah (敬称略)

退会承認

浦狩保則, 大越信孝, 片岡晴雄, 木村貴生, 小池雄一 (敬称略)

現在の会員数 (2010年10月9日)

名誉会員	20名
正会員	1,381名
学生会員	49名
総計	1,450名
賛助会員	15法人
団体会員	5団体

22. 投稿のお願い

統計学の発展に資するもの、会員に有益であると考えられるものなどについて原稿をお送りください。以下のような情報も歓迎いたします。

- 来日統計学者の紹介
訪問者の略歴、滞在期間、滞在先、世話人などをお知らせください。
- 博士論文・修士論文の紹介
(1) 氏名 (2) 学位の名称 (3) 取得大学 (4) 論文題名 (5) 主査または指導教員 (6) 取得年月をお知らせください。
- 求人案内（教員公募など）
- 研究集会案内
- 新刊紹介
著者名、書名、出版社、税込価格、出版年月をお知らせください。紹介文を付ける場合は100字程度までとし、主観的な表現は避けてください。
できるだけ e-mail による投稿、もしくは、文書ファイル（テキスト形式）の送付をお願い致します。

原稿送付先：

〒451-0052 名古屋市千種区不老町
名古屋大学大学院経済学研究科
社会環境システム専攻
根本 二郎 宛

Tel：052-789-4929 Fax：052-789-4924

E-mail：koho@jss.gr.jp

（統計学会広報連絡用 e-mail アドレス）

- 統計学会ホームページ URL：
<http://www.jss.gr.jp/>
- 統計関連学会ホームページ URL：
<http://www.jfssa.jp/>
- 住所変更連絡用 e-mail アドレス：
meibo@jss.gr.jp
- 広報連絡用 e-mail アドレス：
koho@jss.gr.jp
- その他連絡用 e-mail アドレス：
shom@jss.gr.jp